

# ふかんど通信

発行 谷津干潟友の会  
習志野市谷津3-25-11  
TEL.0474-51-5044  
編集人 大滝俊隆

## 楽園の子供達

10

絵と文 森田三郎

### ギンヤンマの大編隊

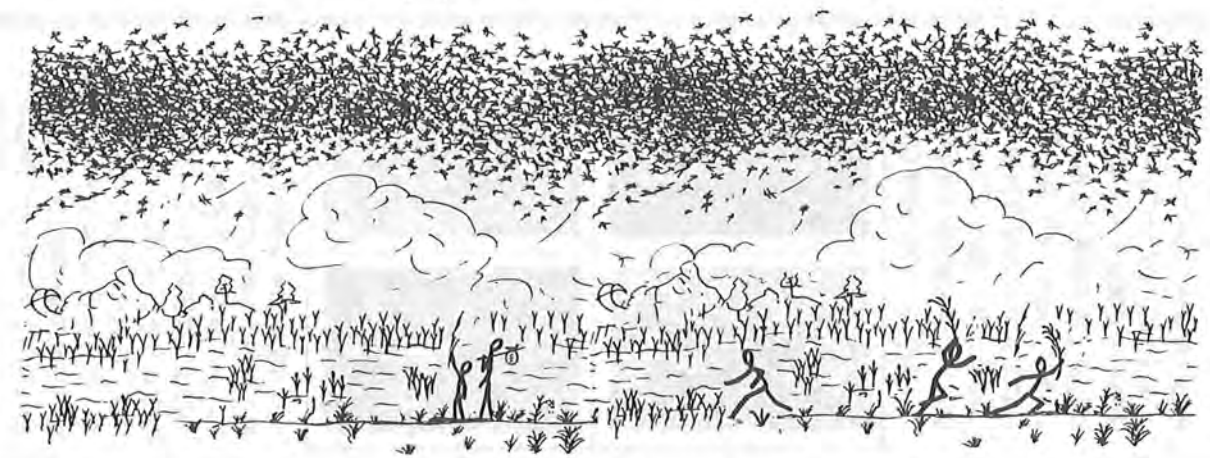
それは、何万、何十万匹とも知れない、ギンヤンマの大群だった。広い干潟を見晴らせる土手道の、すぐそばにある沼の上空だった。群のあちこちで、「ガシヤガシヤ」と、ギンヤンマがブツかり合い、羽根のこすれ合う音がしていた。そして、いたる所で、群から飛び出たり、また入ったりしていた。離れて見ると、ちょうど、うす茶色の雲かモヤが、沼の上に浮んでいるようだった。

色。その背中にあたる潮風に、沼のガマやヨシが波打っていた。当時、こういう光景は、谷津干潟の近くに限らなかつた。山のほうの、谷あいの草むら、野原や田んぼなどにも出現した。そして、ぼくが見た、もつとも大きなものは、今ここに書いてある谷津干潟―その背後地のものであった。真夏の空にさつそうと、互いに飛び交い、群舞する、ギンヤンマの大編隊。少年の頃、陽の光をあびてはばたく、その勇姿は、私のあこがれのマトだった。ギンヤンマこそ「夏の王者」だった。ぼくだけではない、その頃の子供たちにとって「チャンピオン」だった。そんな、ギンヤンマのすさまじい大群が、自分たちの遊ぶ所にいることは、子供のぼくにとつて、ある自尊心と誇りを抱かせた。群の下は、陽の光にさえぎられ、カゲつてウス暗くなっていた。網では全くダメ、石を投げて届か

ない高い所だった。石が落ちる時、二、三匹が石に連られて群から飛び出し、また群へ潜っていった。「すげええええ、さぶう、オンジヨはよお、ここおみんな来んだかなあー、ええつべだよなあ」 「マーちゃんよおー、すげえええ、ペだもんなあー、うれしくなあちやあもんなあー！」

マーちゃんは、「オンジヨとり」の名人だった。私の「先生」だった。ギンヤンマのことは、みんな教えてくれた。オンジヨ網の作りかた、使いかた。どんな天気の日にいっぱい飛んで来るか。朝、昼、晩はどこにいて、どうしているか。水、草、土の上では、その見つけかたもとりかたも違うこと。おびき寄せかた、呼び声、そしてオンジヨにも「格」があることなど……。

すべてはマーちゃんに、仕えて全身を使っておぼえたのである。やがてぼくも大きくなったとき、自分を連れ、ギンヤンマに明けくられた。かつて、あのマーちゃんがやったように……。



### 野鳥の楽園 谷津干潟

### 国の「鳥獣保護区」に 県内では初、十一月一日指定される。

谷津干潟は東京湾のシンボルだ。この習志野にはもう、あの青くて広い、豊かな海の面影はない。雄渾の入道雲の下、赤銅色に焼けた子供たちの、躍動するあの姿は、かの雲とともに沖の彼方へ、開発と汚染の中へ消えてしまった。

滅ぼしてはならない、あきらめてはいけない、次の世代に伝え残したい――。

いろいろな分野の、いろいろな人たちの、小さな、ささやかな行為の積み重ねが、谷津干潟を国設鳥獣保護区特別区にした。昭和六十三年十一月一日に告示されたのである。長くて、激しい道のりだった。実に多くの人たちが、いろいろな立場から応援してくれた。その中の幾人かはすでにこの世の人ではない。



国設鳥獣保護区に指定されたとはいえ、これで谷津干潟は永遠に埋め立てられないというわけではない。鳥獣保護区指定の期間は二十年間と定められている。二十年後に、また開発の波が押し寄せてこないという保証はどこにもない。手放して喜ぶわけにはいかないのである。

谷津干潟は生きた図鑑、絵言葉なる生きた教科書である。そして、みんなのもの、特に子供たちのもの。その谷津干潟を二十年後に失わないためには、今ここでしっかり整備しておかねばならない。そして、それを守り育てていかねばならない。今の子供たちが大人になったとき、やはり「谷津干潟を守っていこう」と思うように――。

「次の世代に残していこう」と思うように――。

明日を担う子供たちの、ふるさとづくりのためにも、今の大人、未来の大人、みんなの協力が必要なのだ。

# 私が描く谷津干潟自然公園の夢

九月に「ふかんど通信」の折り込みで呼びかけた谷津干潟自然公園のプラン大募集は、九月末までに七〇人の応募をいただけて締め切りました。そのうち六三人は谷津小学校六年一組と二組の子供たちでした。子供たち、どうもありがとう。

プラン大募集のヒラは、時間がなかったりその他のいろいろの理由で、秋津四、五丁目や谷津パークタウンなど干潟の周りの一部にか配れませんでした。その他の地域の皆さん、ごめんなさい。いろいろのご意見が寄せられました。大体共通しているのは、干潟の周囲に気持ちよく歩ける遊歩道を作ること、南側の草原はできるだけ自然のままにして、あまり建物などを建てないでおくことです。これらの意見をもとに、われわれ

## ふかんど広場

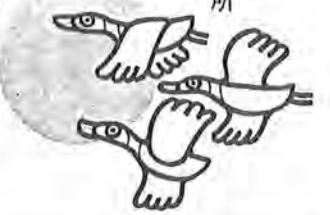
### 自然

千葉市 板橋 博

「自然」—— 実に響きがいいではありませんか一度失った自然は二度とは帰ってこないのです帰って来るのは、人工なのです人工には人工の良さがあってもどんなに「自然」に見せようとしても人工には「らしい」「らしさ」がつく

鳥の観察、スケッチ、眺める  
野原の草花鑑賞  
カメラのシャッター音  
家族連れ、ジョギング、若き男女のカップル、犬の散歩  
心に響く潮風の音に乗って子供たちの楽しげな笑い声  
ユリカモメの空中群舞の挨拶  
カモ、シギ、カニ、ゴカイ  
あらゆる生物の温かい出迎え  
老いも若きも  
さまざま  
人々が集まる  
気楽で愛せる場所

以前は大量のゴミの山  
へドロの海  
驚くほどの悪臭が漂い  
干潟は呼吸困難でした  
一人の勇気ある人物によって  
永い年月をかけ  
跡一つで大量のゴミ、へドロ  
雨の日、風の日、雪が降る日も  
毎日開い、集め、拾い出し  
甦った谷津干潟での光景



① 干潟の部分にはできるだけ手をつけない。干潟の周りの部分に環状の水路を掘り、引き潮による干潟の浸食を防ぐという考えは、干潟に与える影響がはつきりしないので賛成できない。

② 下水処理場が完成するまで、干潟へ入っている下水路を、秋津側（東側）、谷津側（西側）とも干潟よりも海寄りのところまで延長する。この結果、下水は直接干潟へは入らず、満潮の海水と混じり合って入ってくるようになる。

③ 谷津干潟三丁目前面の汚染のひどいところを浄化するために中土手を何箇所か切り、潮の通りをよくする。

④ 南側の自然保護緑地にはできるだけ建造物を造らない。鉄筋の野鳥観察舎のような立派なものも特に必要はない。干潟の周囲の遊歩道に植え込みを作れば、その陰から観察できる。ただし、夏の強い日ざしやわか雨を防ぐあずまや程度のものを二、三個所ぐらい造る。

⑤ 南側の市保護緑地に淡水池を造る。淡水性の野鳥をよぶためまた、湾岸道路に近い方はできるだけ葦原を残す。その他の部分は樹林と自然にまかせる草原にする。

⑥ 観察舎兼ミニ博物館を北側のバラ園に近い干潟の岸に造る。博物館は、東京湾の自然、習志野市の歴史などを含めて展示する。バラ園とミニ博物館・観察舎の相乗効果で人をひきつける。(進)

## 谷津干潟のイメージソングが出来る。

### やすらぎの干潟

作詞 ぶちさわまさき  
作曲 山本 裕士

一、流れ水が 風に道わかれ  
旅の途半ばに オアシスよ  
よび交う頃と 舞う羽翼  
まよわす ほぐれす  
夢と夢の  
霧雨にやみ  
水鏡を眺め  
やまのこ  
鳥の心  
愛  
心  
愛  
心  
愛  
心  
愛

私は谷津で十八年間自営業を営んでおります。年々、この町も都市化が進み、私がこの町に来た時と比べますと、ずいぶん変わりました。ましてや地元で生まれ育った方などは、年々故郷の面影が少なくなってきたかと思っております。隣の店の主人は地元の方で、「小学生の頃は、谷津の浜は銀砂で、海岸からは丹沢の山々や富士山も見えた」と話しております。

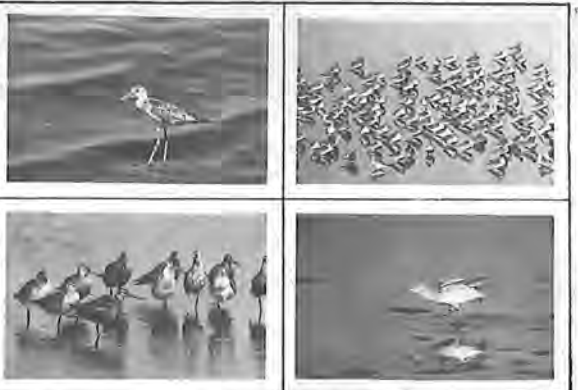
東京湾埋め立てなどにより、今の姿に変わりましたが、この干潟は「谷津干潟愛護研究会」や「谷津干潟友の会」の皆様のやさしい心により守られてきたと思っております。鳥が羽を休めたり、たわむれている姿は心やすらぐものです。

私は、干潟、人間、鳥とのふれ愛がいつまでも続きますように、何か形にしてみたいと思ひ、歌好きの仲間山本氏と一緒に詩と曲を作ってみました。折にふれ、故郷「谷津干潟の歌」としてみなさんで口ずさんでいただければと思います。

## 谷津干潟の仲間達 3



写真は前回と同じく、会員で、野鳥写真家の五十嵐吉夫さんの撮影したもの。お問い合わせは、谷津干潟友の会または山岸弘夫 氏 〇四七四(54)三〇二八まで。また、毎週日曜日午後一時から谷津干潟クリーン作戦現地(南岸あずまや「いそしぎ」付近)でも取り扱っています。お気軽に声をかけてください。



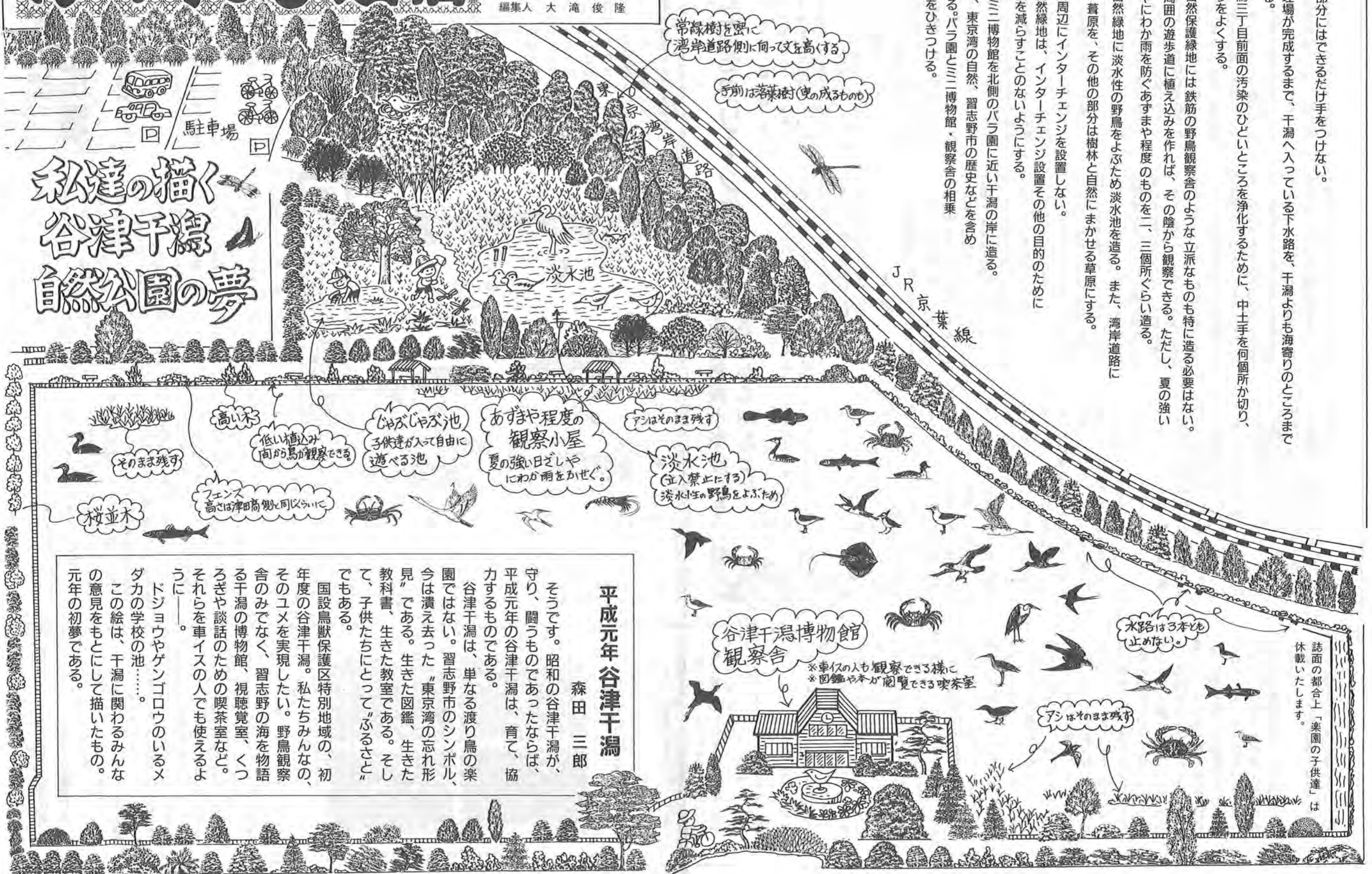
第2弾「シギシリーズ」5枚組の内の4枚

絵はがき「谷津干潟の鳥」  
第二弾「シギシリーズ」に続き「鳥獣保護区指定記念」  
第三弾も発行!!

好評の「谷津干潟の鳥」の絵はがきを発行した谷津干潟友の会では、第二弾として「シギシリーズ」を、また十一月一日の国設鳥獣保護区指定を記念して第三弾も発行しました。

今回は、ダイシャクシギや、小学校四年生の国語の教科書にも登場したオオソリハシシギ、珍しいアカエリヒレアシシギなど、パッと見ただけではいるのかわからないかわからないような地味な羽色の鳥たち、馴染みのある鳥たちで、落ち着いた感じ、明るい感じと趣向をこらしたカラー五枚組です。

# ふかんど通信



① 干潟の部分にはできるだけ手をつけない。  
 ② 下水処理場が完成するまで、干潟へ入っている下水路を、干潟よりも海寄りのところまで延長する。  
 ③ 谷津干潟三丁目前面の汚染のひどいところを浄化するために、中土手を何箇所か切り、潮の通りをよくする。

④ 南側の自然保護緑地には鉄筋の野鳥観察舎のような立派なものも特に造る必要はない。干潟の周囲の遊歩道に植え込みを作れば、その陰から観察できる。ただし、夏の強い日ざしやわか雨を防ぐあすまや程度のもを二、三個所ぐらい造る。

⑤ 南側の自然緑地に淡水性の野鳥をよぶため淡水池を造る。また、湾岸道路に近い方は葦原を、その他の部分は樹林と自然にまかせる草原にする。

⑥ 谷津干潟周辺にインターチェンジを設置しない。南側の自然緑地は、インターチェンジ設置その他の目的のためにその面積を減らすことのないようにする。

⑦ 観察舎兼三三博物館を北側のパラ園に近い干潟の岸に造る。博物館は、東京湾の自然、習志野市の歴史などを含めて展示する。パラ園と三三博物館・観察舎の相乗効果で人をひきつける。

常緑樹を密に湾岸道路側に向って丈を高くする  
 手前は落葉樹(夏の成るもの)

東の京湾岸道路

JR 京葉線

あすまや程度の観察小屋  
夏の強い日ざしやわか雨をかせぐ。

淡水池  
(立入禁止にする)  
淡水性の野鳥をよぶため

じゃぶじゃぶ池  
子供達が入って自由に遊べる池

低い植込み  
向が鳥が観察できる

フェンス  
高さは津田高側と同じくらい

そのまま残す

桜並木

高い木

## 平成元年谷津干潟

森田 三郎

そうです。昭和の谷津干潟が、守り、闘うものであったならば、平成元年の谷津干潟は、育て、協力するものである。

谷津干潟は、単なる渡り鳥の楽園ではない。習志野市のシンボル今は潰え去った「東京湾の忘れ形見」である。生きた図鑑、生きた教科書、生きた教室である。そして、子供たちにとって「ふるさと」でもある。

国設鳥獣保護区特別地域の、初年度の谷津干潟。私たちがみんなのそのユメを実現したい。野鳥観察舎のみでなく、習志野の海を物語る干潟の博物館、視聴覚室、くつろぎや談話のための喫茶室など。それらを車イスの人でも使えるように――。

ドジョウやゲンゴロウのいるメダカの学校の池……。

この絵は、干潟に関わるみんなの意見をもとにして描いたもの。元年の初夢である。

誌面の都合上「楽園の子供達」は休載いたします。

水路は本池止めない。

谷津干潟博物館  
観察舎  
\*車イスの入も観察できる様に  
\*図鑑や本が閲覧できる喫茶室

アシはそのまま残す

馬車場

# ふかんど 広場

## 谷津干潟は海です

市川市 田 中 明 信

この一年余り谷津干潟と接して、この頃、谷津干潟というのには立派な海なんだなあと思えるようになってきた。

私がこの干潟を初めて見た時は、「これが干潟！」と心の中で叫んでいました。というのも、ここに来る時に頭の中で描いたイメージとあまりにも違っていたからです。そこには、周りをコンクリートの壁で囲まれ、高い建物や高速道路がすぐそこまでせまっている黒い湖のようなものがあった。しかし、そこには、いままで図鑑でしか見たことのない鳥がたくさんいて、私にはとてもアンバランスで不思議な空間に見え、初めはなぜこんなに多くの鳥がいるのか理解できなかった。

そのうち、何回かこの干潟に通っているうちにその理由がわかるようになった。それは、この干潟が生きているからなのです。面積はとても狭いが、広大な干潟と同様に干潟としての機能を持っているのです。ここには、鳥の餌である底生動物が棲息できる環境があ

る。それを可能にしているのは、潮が干満を繰り返して、干潟がさまざまな生物、動物に必要な酸素と栄養を供給しているためです。毎週日曜日にクリーン作戦をやっていますが、これは、ビニール空き缶・流木等を取り除いて、干潟が呼吸しやすいようにすることなのです。簡単に言うと、ビニール等のゴミで鼻と口をふさがれた泥はやがて死んでいき、その下では生物は生存できなくなり、それを餌としている鳥の数も減って

しまいます。干潟には手はありませんので、自分でゴミを取り除くことができません。しかし、我々人間の手でそれを取り続けていく限り、干潟は自然の海同様に機能し、私たちにもすばらしいものを与え続けてくれるのです。谷津干潟に起こっている問題はゴミの事だけではありませんが、とりあえずできるものから問題を解決していくことが大切だと思います。

## 谷津干潟の仲間達 4

**ぼら (ぼら科)**  
あたたかい地方の海にすみ、大きなもので体長80cmくらい。

**オナガガモ**  
アジア、ヨーロッパ、北アメリカ大陸の北部で繁殖し、谷津干潟には冬鳥としてたくさん渡来します。雄の尾は長く、雌の尾も他のカモに比べ長く、雄の頭部は黒褐色。

**ハシビロガモ**  
くちばしが大いカモでヨーロッパ、アジア、北アメリカで繁殖し谷津干潟には冬鳥として渡来します。雄の頭部は緑色光沢のある黒、胸は白、ワキと腹は栗茶色。

おす、めす (for ducks)

## 私たちもクリーン作戦を

### 柏市富勢西小学校六年二組の皆さんからのたより

柏市 駒 場 信 久

どうかこれからも日本の自然を守るために頑張ってください。私たちも頑張っています。実際、子供たちのごみ拾いの輪が少しずつですが広がりはじめたのです。

土屋 恵

この間新聞で森田さんのことを知りました。そこで、私たち6の2も森田さんの一員になりたいと、ゴミ拾いを始めることにしました。森田さんの14年間にはおよぶこともできませんが、2日間「6の2クリーン大作戦」ということで、ゴミ拾いをしました。

そんな矢先に森田さんのことを知りました。そして子供たちに、「私たちにも何かできないか」と投げかけました。普段の学校の清掃もまじめにやれない子供たちです。しかし、だからこそ、事故犠牲の精神は勤労の喜びを身につけさせたかったのです。子供たちも、森田さんの行動に胸を打たれ、すぐ私の提案にういついてきました。そして学級会で話し合い、地区のごみ拾いをする事になったので

す。

どうかこれからも日本の自然を守るために頑張ってください。私たちも頑張っています。実際、子供たちのごみ拾いの輪が少しずつですが広がりはじめたのです。

ゴミを捨てないよう呼びかけていきましょう。

浅川 綾子

私たちはクラスで地区のごみ拾いをしました。1時間30分しか拾わなかったのですが、それでも大きなごみのふくろが合計18も集まりました。その中でも、空かんは7ふくろで一番多かったです。谷津干潟もやっぱり空かんが一番多かったのです。

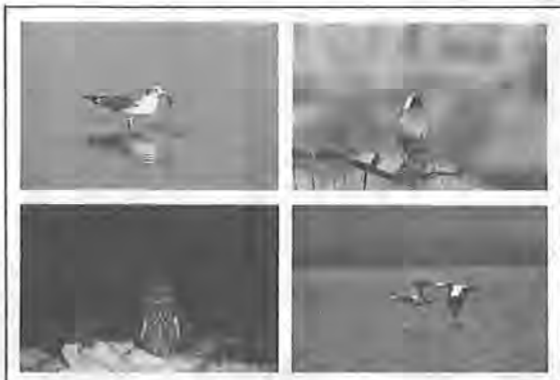
空かんやビニールなんかの他に、針のなくなった体重計やタイヤのない自転車なんかも捨ててありました。まさかこんな大きな物までその辺に捨ててしまう人がいるなんて思わなかったから、びっくりしました。

加藤 睦 美

私たちは森田さんの記事をきっかけに学区内のごみ拾いをしました。森田さんのように一日中ごみを拾ったわけじゃありません。たった一時間です。しかし、たった一時間でも山のようなごみが集まりました。私たちも機会があったら一週間に一回はごみ拾いをして

## 絵はがき「谷津干潟の鳥」 第三弾発行!!

「アラッ、かわいい!」、「エッ、こんな鳥がいるの?」と好評を博しているのが「谷津干潟の鳥」第三弾です。今回は、めったに干潟には姿を現さないアカツクシガモ、中にはなかなか確認できないコミミズク、おなじみのウミネコやチドリなど、会員の野鳥写真家 五十嵐吉夫さんが「忍」の一字でシャッターチャンスをもとにした5枚組。何げなく見過ごしているジョウビタキも、美しい色で絵はがきになりました。



第3弾 5枚組の内の4枚

お問い合わせは谷津干潟友の会 山岸弘夫(TEL0474(54)3028)まで。  
また、毎週日曜日午後一時から谷津干潟クリーン作戦現地(南岸あずまや「いそしぎ」付近)でも取り扱っています。お気軽に声をかけてください。

ヤマダ タケフミ

ぼくたち富勢西小6年2組は、森田さんが谷津干潟の掃除をしていることを聞き、7日にゴミ拾いをしました。範囲は富勢地区でしたけれど、いざやってみると、大きなポリ袋に入りきらないほどのゴミがありました。また、クラス全体のゴミを合わせると、なんとポリ袋20袋以上ありました。空かん、空ビン、プラスチックなど数々の種類のゴミがあり、ビックリしました。

ときには仕事をやめ、ちよ金を使いながら、ゴミ拾いをしたり、あるいは変わり者扱いされてもゴミ拾いをしていた森田さんの苦勞が目につくかぶようです。その苦勞の一部を6年2組一人ひとりみんな味わいました。1日、いや1時間しかゴミ拾いをしていないけれど、森田さんの苦勞がよくわかりました。そして、努力がむくわれ、谷津干潟には海藻が生える程きれいになって、良かったと思います。これからも谷津干潟を今までにない最高の美しい干潟にしてください。

# ふかんど通信

発行 谷津干潟友の会

習志野市谷津3-25-11  
TEL.0474-51-5044

編集人 大滝俊隆

## 吉川英治文化賞に森田さん



野間理事長から文化賞を受ける森田さん(左)

第二十三回吉川英治賞の贈呈式が十一日夕、東京・帝国ホテルで開かれ、習志野市谷津三丁目、タクシー運転手で同市議、森田三郎氏(以下五人に文化賞、作家・早乙女貴氏に文学賞、椎名誠氏と岡嶋二氏に文学新人賞が、主催者の吉川英治国民文化振興会・野間佐和子理事長からそれぞれ贈られた。

### 谷津干潟保護に献身 森田三郎さんに贈呈

英治賞 川化 吉文

森田氏は十五年前にわたり習志野市・谷津干潟で黙々とゴミを拾い続け、ひん死の干潟を野鳥の楽園にのみがえらせた功績が認められた。この干潟は昨年、鳥獣保護区に指定されている。

森田氏は「幾重もの困難をともに乗り越えてきた人たちがいる。この賞は、こうした人々をほめてやる市民みんなのもの。もし、私だけだったら、励まし、協力、支えてくれた人たちに何をもうって報いたらいいのか」と感想を述べている。

今回の受賞を祝い、五月四日には干潟で、森田さんを囲み、野鳥たちを見ながらの屋外パーティーを予定している。

吉川英治文化賞 日本文化の振興に寄与した吉川英治を記念して制定されたもので、第二十三回目。対象は日本文化の向上に尽くし、たなえられるべき業績をあげながらも、社会的に認められることなく、報われることの少ない人や団体。選考委員は井上靖氏、扇谷正造氏、三浦朱門氏、吉川英明氏。

### 受賞のことば

森田三郎

この賞は、習志野市民の皆さんみんなのものなんです。過ぎしこのかた、幾多の困難を乗り越えてきた人たちのもの……。もしそうでなかったら、何をもらって報いたらいのか。どうやってそのお礼をしたらいのだろう……。15年前の、やり始めたあの真冬のこと……。ただただ感無量です。やったというよりも、やらせてもらったという心境です。ほんとは、ほんとうにありがとうございます。いろいろなことがありました。多くの人々と巡り合いました。直接、間接を問わず、たくさんのご協力と励ましをいただきました。想い起こせば起こすほど、願ひるほどに、胸の奥底より感謝と熱きものがこみ上げてきてしまします。谷津干潟を想いつつ、黄泉の旅路へ立ったひと。今は懐かしく思います。

「ふかんどよ、ガキ大将のマーちゃん、網曳きじいさん、かの夏雲と遠浅の海の生き物たちよ、潮の香よ、みんなみんなありがとう」

# 楽園の子供達

## 「うんが」の名残り

千葉街道が船橋―取手線と交わるガード下、海寄りのところに細長く船の形をした、古びたコンクリートの柱がある。二本はむき出しのまま、二本は半ば土手に埋もれ、他の一本は花輪インターの土の中にかくれている。父や古老の話によれば「運河」の水門にするためであつたらしい。戦前、国では利根川から谷津を経て東京湾に通ずる運河を作る計画があつたという。だから、もしこの計画が完成していれば、いまごろは汽船がここを行き交う光景を見ているかもしれない。

かつてここは湧き水もあつて、子供達はその水を飲んだり、汚れた体を洗ったり、疲れた体をいやしたりしていたものだった。

「運河」の名残りはもう一つある。谷津干潟から始まって、まっすぐ北へ向かい、現在の谷津ハイツ↓花輪インター↓東金街道にぶつかる船橋高校のグラウンドまで氷河のようにU字形にくぼんでいのがわかるだろう。運河を作るために掘った、その跡である。

船高のグラウンドが大きな穴のように落ち込んでいるのは、そのためである。太平洋戦争による工事の中断がなければ、船高の生徒たちは校舎の窓から「ポーツ」と汽笛を鳴らしながら走るハシケの通いを見て勉強していることになる。

そのU字形にくぼんでいる一帯を、子供のころ私たちは「うんが」と呼んでいた。「うんが」のところは船橋市だが、習志野市との境あつた。ここはまた東経10度の線上でもあり、私たちは「山崎別荘」と呼んでいた。うっそうとした大きな森のてっぺんには、白い旗が立っていた。

そのころの「うんが」あたりは人家がほとんどなく、U字形の広くて長い「谷」には一軒もなかった。南の方は、野原と畑の遠くに海が大きく広がり、白帆がいっぱい浮かんでいて、はるか彼方に房総の青い山なみが見えた。

ススキやカヤなど背の高い雑草がところどころに茂っていて、踏みつけ道をたどって走り回る子供たちの姿がスッポリとかくれてしまふのだった。こんな草原と畑の広さって、うんがから、キリギリスなどバツタ類の天国でもあつた。



夏の、ムツとする草いきれと、乾いた土の匂い――いたるところでするトノサマバツタやキリギリスの声――夏の夕方のすさまじいばかりの大合唱――秋のコオロギのわき上がるような鳴き声――初秋の、さわやかで澄みきった、そしていくぶん寂しいススキ野原や草の波――野ウサギがいっぱい跳んでいた「ウサギ山」。

初秋の夕焼けだった。みんな、まっかっかになるころ、あとには野ウサギが、そして前には広大な干潟と白帆の山なみ――風車と沼とヨシ野があつて、バツタ採りの帰り、ぼくはただポツンと見ていた。

千葉日報 '89.4.13より転載

# 「吉川英治文化賞」は森田さんにふさわしい賞

習志野市長 三上 上文

森田三郎さんの「吉川英治文化賞」の受賞を心からお喜び申し上げます。

吉川英治文化賞は、長年にわたって黙々と日本文化の向上に尽力しながら、社会的評価も得られず、報われることが少ないにもかかわらず、所信に向かって歩み続けている人、又は団体に贈られます。

吉川英治先生を私は直接には存じあげません。しかし、「忘れ残りの記」「草思堂随筆」「折々の記」などの先生の著書を通してだけでも、日の目をみない所にまで心を配られる暖かい心の持ち主であったことがよくわかります。

吉川英治文化賞は、まさに吉川先生の暖かい

肌合いからの人間性に最もふさわしい賞であると感銘しております。

第二十三回の吉川英治文化賞が習志野市谷津の住人、森田三郎氏に贈られます。この賞こそ、森田さんにまことにふさわしい賞であると私は強く感じております。

森田さんは、十五年余の長い歳月をかけて、それまでは「ゴミ捨場」に近かった谷津干潟を野鳥の楽園に創り育ててこられました。文字どおり、最初は唯一人で何年も取り組み続けられた、その結果次第に共鳴する同士が増えてきました。二年前に多くの市民に押されて市議会議員に選ばれました。そうだった今日でも、森田さんは干潟の清掃活動に多く

の時間をさいしております。

私は、森田さんのひたむきな取り組みを見ていると、次の言葉を思い浮かべます。

「高く登ろうと思うなら、自分の脚を使うことだ」。高いところへは、他人によって運ばれてはならない。ひとの背中や頭に乗ってはならない。「（ニーチェ）「ツァラトゥストラはこう言った」」。

昨年、谷津干潟は、千葉県では唯一の国設鳥獣保護区に指定されました。森田さんの自身の脚での歩みは、これまでで終わりはありません。むしろこれからの歩みこそ、ほんとうの意味の野鳥の楽園創りの正念場であると思います。

（財団法人吉川英治国民文化振興会 発行「吉川英治賞のしおり」より転載）

## あじさい会 野外油絵展



油彩「谷津干潟」川島米子画

自然を愛し、地域文化の発展に努力している絵画グループ「あじさい会」は、此の度 谷津干潟が国の鳥獣保護区に指定されたのを記念して、「谷津干潟友の会」後援のもとに、谷津干潟、海、港等をテーマにした会員の油絵約30点を展示いたします。何卒御鑑賞御高賜り度く御願ひ申し上げます。

■会期/1989年5月4日・5日

午前10時～午後4時

■会場/谷津干潟南側自然緑地

(雨天の場合は中止とさせていただきます。)

## 鳥との交わり

秋津久我喜久次

夕方街に、ガス燈が灯ると、蝙蝠が踊るように飛び交う。小学生になって、蝙蝠は獣だと教わった。▼お葬式は大概行列だった。二米くらの高さの竹籠に入れられた鳩を、人足が担いでいた。鳩は式場で空に放たれる。これは放生施という風習だ。▼忍者みたいな格好の男が、モチをつけた竹竿、腰には網袋をぶら下げ足早に歩いて行く。「鳥刺」といって、野鳥を獲り、生計をたてている人。▼アメリカのナイルス、スミスという名の二人の飛行家が、青山の練兵場で宙返り飛行をやり、東京中を沸かした。流行歌にもなったし、新聞には「二人の鳥人」と書いてあった。▼以上は、幼稚園から小学四年生ころまでの、ふるさと東京日本橋区(今の中央区)の明治から大正初期(一九一三)の記憶である。▼その日本橋も今はピルの谷間だ。自然は何一つ残っていないし、所帯も減っているの、鼠にも生活の場所でないのかもしれない。▼某日夕、谷津干潟に行った。地肌をあらわにした干潟は、針一本のゴミさえなく、十年前のあの汚れが嘘のように思えた。目を凝らすと、鴨が数十羽寄り添っていた。その啼き声は「シアワセ」

# ふかんど広場

「シアワセ」と私は聞いた。▼投票を済ませ干潟まで歩く。谷津パークタウンの様々な建物が朝の光に浮き出され、満潮の干潟は鏡の様にこれを映し美しい。ふと私はスイスのレマン湖を想像した。近代工業に成るビル群と、自然のままの野鳥の楽園との総合美の演出者森田三郎さん、アリガトウ。君の、「一に実行、二に実行、飽くまでも実行」、この教訓は尊い、永遠に尊い。(時年八十七歳)

## 小櫃川河口干潟を

訪ねて

葦原のくねくねとした小路を歩き続けると、突然目の前がパァーと開けて、そこには広い広い干潟がありました。

春の日のかげろうの中、赤いバケツと長靴姿の潮干狩の親子連れ、その横には、長くのりひびが続く。そしてそのずっと遠くの海の向こうには、君津の巨大なコンビナートの姿が、もうもうと煙を吐きながらどす黒く浮かんではいるのです。それは、まるで遠い昔と未来が交差しているような不思議な景色でした。

谷津干潟しか知らない人なら、干潟とは、ドロドロとぬかるみで歩くこともできないと思ってしまうでしょう。ところが「本物」は違ふのです。サクサクと堅く、足の裏にもなんとも気持ちの良い感触なのです。森田さんが子供の頃、谷津の干潟を竹馬で走ったとか、

## 谷津干潟の仲間達

### だいぜん

大きなちどりで、ツンドラで繁殖し、春と秋に干潟に渡ってくるが、冬を越すものもいる。ビューイーとかなしそうな声でなまきます。



### やまとおさがに

本州の干潟に住み、甲の幅が4cmほど。引き潮の時、穴から出て甲羅干しをしている姿は、遠目には干潟の上に石ころが沢山ある様に見える。



### ちごがに

東京湾から九州の干潟にあなをあけて住んでいる。引き潮の時穴から出てハサミをふっているので体操ガニの愛称で呼ばれている。甲の幅は1cmくらい。



飛行機が滑走路に使っていたとかいうのもうなづけるのです。そして鳥はといえば、これはもうとても見つけられない……。このどこまでも広い干潟では、思いっ切り散らばって生きているようなのです。

寄せあい、ひしめくように生きているのが、なんだかわれに思えるのでした。いつ行っても必ず鳥の姿が見られるということに慣れてしまっている私たちは、大事なことを忘れていたようでした。気持ちの良い春の日、あなたもぜひ一度自然のままの干潟を訪ねてみてはいかがでしょうか？

## 谷津干潟の絵はがき第四弾発行!! 森田さんの文化賞受賞を記念して



第4弾 5枚組の内の4枚

谷津干潟友の会では、会員森田三郎さんの第23回吉川英治文化賞受賞を記念して、絵はがき「谷津干潟の鳥」シリーズ第四弾を発行しました。

写真はこれまでと同じく会員の野鳥写真家五十嵐吉夫さんが撮影したもので、5枚組。

お問い合わせは谷津干潟友の会 山岸弘夫(TEL0474(54)三〇二八)まで。

また、毎週日曜日午後一時から谷津干潟クリーン作戦現地(南岸あずまや「いそしき」付近)でも取り扱っています。お気軽に声をかけてください。

# ふかんど通信

発行 谷津干潟友の会  
習志野市谷津3-25-11  
TEL.0474-51-5044



昭和53年頃の谷津3丁目地先干潟と



現在の同場所

## 谷津干潟整備計画

森田 三郎

いよいよ今年度から谷津干潟の整備計画が動きだしました。すでに地質調査などに取っかかり、来年度から工事が始まります。  
干潟を取り巻く周辺緑地をどのようにするか。月並みな、コンクリートやアスファルトで固めた、人工的なものでいっばいの都市公園にしてしまおうのか。皆さんはどのような将来像を描き、希望しているでしょうか。私たち習志野市民が全国に誇りに足るこの谷津干潟をどう守り、育て、残していくかが試される時が来ています。

いやしくも、整備して、工事が完成したら、かえって干潟の環境が悪くなり、渡り鳥や魚やカニが減ってしまった、ではすまされません。

「街の中に海が出前してくれる」谷津干潟の行く末を、いま全国の人々が注目しています。もし、立派にその自然環境が保存され、成功したならば、その例は日本はおろか世界でも見当たらないでしょう。

谷津干潟は、言うまでもなく、「干潟だから」価値があるのです。間違っても「箱庭的」な、ちんまりしたものに値するものではありません。利用する価値よりも、その利用に値する「その自然的環境の存在」を大切にしたい。「利用」という卵が欲しいなら、その欲しい卵を産んでくれる「谷津干潟」という「ワトリ」を大事にしなければなりません。

谷津干潟は、国設鳥獣保護区特別地域であり、自然教育園であり、子供たちにとっては「ふるさと」です。決して観光資源や利用施設にするために残されたのではないということを忘れてはならないのではないのでしょうか。

# 楽園の子供達

絵と文 森田 三郎

## 夜 浜

夜の干潟のことでした。潮が引いたあと、アサリやハマグリ、シオフキを取りに行くのです。

頬をなでる風も温かく、陽気もよくなった頃だった。幼い私は母に手を引かれ、夜の海へ行きまし

た。するとそこに、人がいっぱい出ていたのです。その頃の私は、夜の海が気持ち悪く、怖いもの

に思えたのです。それなのに、みんな話をしながら沖の方へ出て行くのです。月明かりの下、人の影が黒い点となって、夜の広い干潟のあちこちにも散らばっているの

ぼろくしてから母は、「ただねえ三郎、本当は、夜の海は怖いんだよ。方角がわからなくなると、深みにはまっちゃうか、潮のま

れちゃうかも知れないからねえ。だからあ、みんなあまり離れない

でいるか、一人だけで遠く行かないんだよ」とも言った。

その当時はまだ、物資も乏しく、食糧もまじく少なかった。だから、昼間海に行けない人たちは、おりが

あると、夜の海に出て貝を取り、食へ物のたしにもしていたのであ

った。  
母と一緒に貝を取っている人たちの間を歩いていくと、あちこちつちから、いろんな話し声や、笑い声が聞こえてくるのです。月明かりと夜の海は、綺麗で、ちよつと淋しい感じなのに、浜へ出ている人たちは賑やかで、声も大きかった。はしゃいでかきまわり、オ

ーちゃん、わかったよおー！、そんな叫び声も聞こえてきました。そこで、海の真ん中で、貝を取りながらご飯を食へたり、重箱やふろしき包みを開けたりして、皆んなとつてもおいしそうでした。うちじゅう、あるいは、近所の人たちなのだろう、仲よく楽しい光景だった。中にはお酒を飲んだりして、踊ったり、「月があ出た出たあ、月があ出たああヨイヨイ……」なんて、大声を出して歌っている人たちもいました。



## 夜 浜

大潮で満月の夜、人々はうみに出て貝を取りました。月明りの下でみんな楽しんでいた。ごはんを食へたり、お酒を飲んで大声で歌い、おどる人もいました。

# ふかんど 広場

## 谷津干潟で

### ハゼ釣り大会

谷津干潟で九月二十三日、谷津干潟釣り愛好会（代表淵沢督機さん）主催による第一回谷津干潟市民ハゼ釣り大会が行われ、小学生



から七十九歳の元気なおじいちゃんまで約百四十人が参加しました。国の鳥獣保護区である谷津干潟の鳥たちが、釣り糸や釣り針などで傷つけられたり、干潟も汚れてしまう。そこで「やすらぎの干潟」の作詞者であり、谷津干潟友の会の会員でもある淵沢督機さんが、「釣りのマナーを守りましょう」と呼びかけるために企画したものでした。釣り糸をたれてもすぐ引っかかってしまうので、半年がかりで小型ダンブ二台分のゴミを拾いました。特に釣り糸と針が大量に放置されており、その回収に苦勞した所です。

優勝したのは谷津二丁目目の会社員谷島章さんで、釣果はハゼ約二キロで百八匹。また、ハゼの他に二十八センチ程のアイナメやボラを一人で釣った人もいて、大物賞など、習志野市内の商店会や釣り具屋さんから寄付されたたくさんのお賞が参加者に贈られました。盛会だっただけに「来年も」という声がある一方、「鳥への害がひどいのでやめてほしい」との声もあります。釣り人のマナーがそれを決めるでしょう。

## 谷津干潟自然教室が

### 始まりました。

八月から、毎月第二日曜日、谷津干潟自然教室を開いています。毎回テーマを決めた観察と、楽しいゲームをやります。

八月は「鳥のくちばし」、九月は「ヤマトオサガニ」が観察テーマでした。

十月八日には、第三回が開かれました。午前は「昆虫」と「クモ」をスケッチして、違いを観察しました。

お弁当のあとは、大人と子供たちのグループに分かれ、「自然からの借物ゲーム」が行なわれ、時間と2ポイント差で見事、子供グループの勝。



植物の観察をする子供たち

植物とマクロの世界で接し、あらためて自然の面白さを認識しました。自然を愛し、外で楽しく遊んでいるうちに、いつの間にか、生き物や植物を観察する目が養われてきます。親も子供も、仕事や家事業や、勉強のことを忘れて、「子供にかえって」谷津干潟であそびませんか。お世話してくれるのは、東京・葛飾区の「みずもと自然観察クラブ」の佐々木洋さんたち。長い間「こども自然観察会」を都立水元公園で続けてきたベテランで、鳥・植物・昆虫など、自然ならなんでもござれという、頼もしい人達です。対象は小学生とお母さん（お父さんも歓迎）。子供だけでも参加できます。参加費は一人百円。毎月第二日曜日、谷津干潟南側あづまや「いそしぎ」（湾岸道路の方の岸）に午前十時集合。お弁当と飲み物持参で、午前は観察、午後はゲームです。解散は午後二時ごろ。

## 森田さん 朝日森林文化賞を受賞



谷津干潟愛護研究会代表の森田三郎さんが、六月三〇日、第七回朝日森林文化賞自然保護部門優秀賞を受賞しました。今年四月の吉川英治文化賞受賞に続く快挙です。

朝日森林文化賞は、朝日新聞社と森林文化協会が主催し、環境庁、農林水産省、建設省が後援するもので、今年の自然保護部門優秀賞は、森田さんと北海道の「小清水自然と語る会」の二件に贈られました。正賞はブロンズ製のレリーフ、副賞は賞金百万円でした。緊張した表情でレリーフを受け、森田さんは、「今まで、私を支えて下さった習



（写真：平成元年6月13日付朝日新聞より）

志野市民や、干潟を愛するみなさん、そして何よりも、干潟の生き物たちのおかげです」と、例のトットツとした話した方で、受賞の挨拶をして、参加した人々の胸を打ちました。今後も皆様のご支援をよろしくお願いします。

## 谷津干潟の仲間達 6

### コサギ

小型の白サギで全長が60cmくらい。くちばしは長く黒いが足指が黄色い。夏羽は頭部のうしろから2本の長い冠羽が出て、ミノばねの先が上にそっている。



### ホウロクシギ

全長62cmアジアの東北部で繁殖し、日本には旅鳥として春と秋に干潟にやって来ます。ダイシャクシギと大きさ・形もよく似ているが、ダイシャクシギよりも褐色味が強い。



### ダイサギ

白サギの仲間の中で最も大きく、全長90cmくらい。夏は背からミノ状の飾羽が出る。



### おなもみ (さく科)

茎は高さ約1mくらいになり、葉や茎に毛がある。実の表面にはカギ形のとげがあり着物に付く。



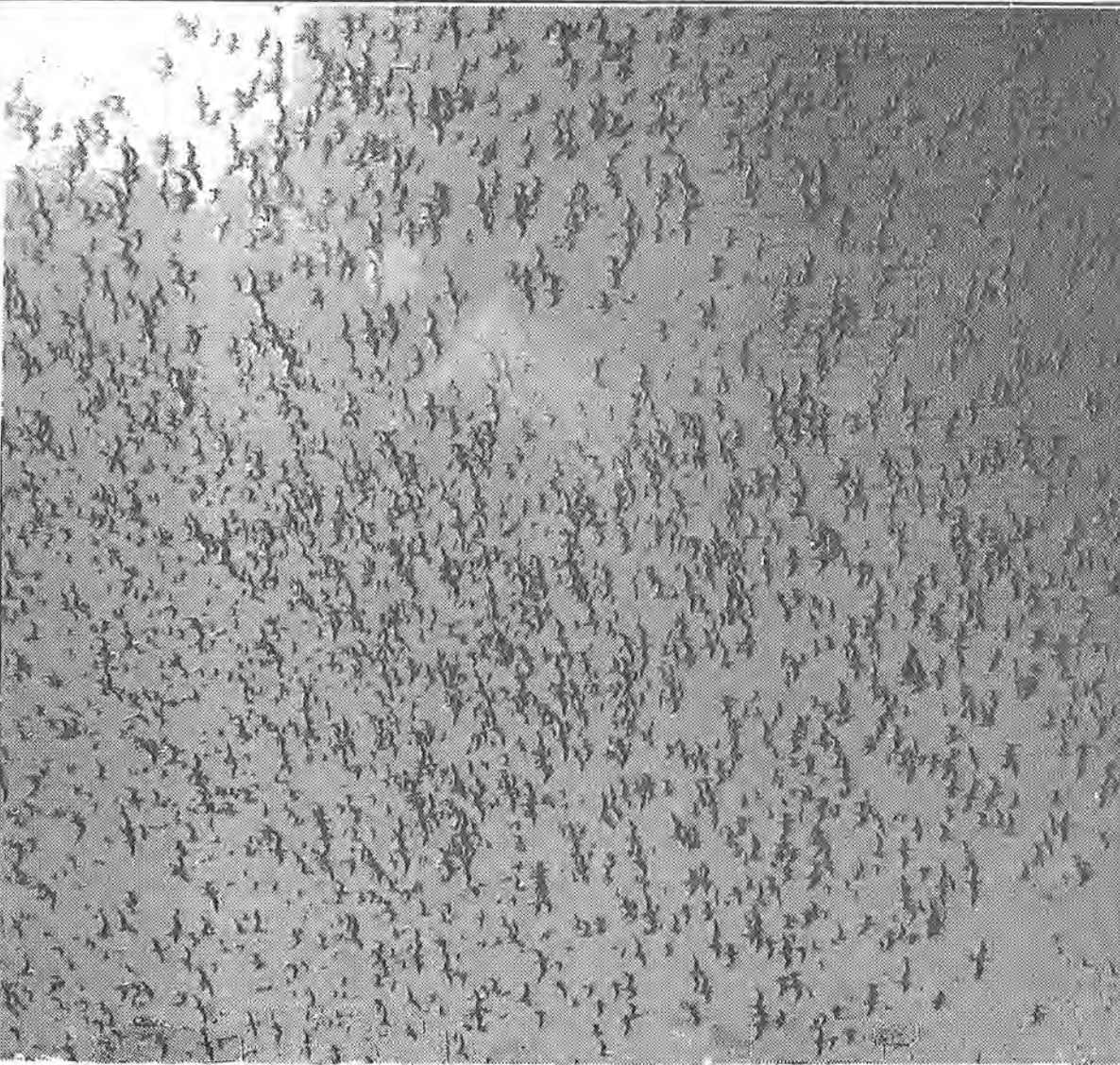


# ふかんど通信

発行 谷津干潟友の会

習志野市谷津3-25-11

TEL.0474-51-5044



東京湾へ向かうユリカモメの群 (写真提供: 谷津3丁目 飯島 実氏)

## 巣立ち

クリーン作戦、友の会、愛護研究会のみな様こんにちわ。ぼくは友の会の堀井英幸です。ぼくはこの友の会に入ってから三年たっています。

ぼくも、この三学期がおわると、中学生になります。べつにこの友の会をやめるといってもいいし、ひがたにこないわけでもありません。ただ、この小学校生活としてのひがたのみな様、そしてひがたの鳥や、貝や、さかなへのメッセージや、いままです。楽しんでおくりま

す。ひがたのみなさん、三年間お世話になりました。みんなと、とんじるやジュースをのんだり、ひがたで遊んだり、そうじをしたり、とても楽しい三年間でした。どうかみな様もカゼをひかず、ひがたをだいじにしてください。

平成二年一月

堀井 英幸より

# 楽園の子供達

13

絵と文 森田 三郎

### 干潟の子供達

それは、広い干潟のまん中であつた。そこにいると、自然と大きな声をハリ上げたり、思い切つて駆け出したり、飛びはねたりしたくなつてしまふのであつた。とても、シツとなんかしていられなかつた。そう、動物的になつてしまふのだ。

サン／＼と照りつける真夏の太陽のもと、オチンチンを丸出しにして、「キヤッ／＼」、「ニコウ」と笑つと、陽焼けした子供たちの目と歯だけが白かつた。

そこで僕たちはやったのだ。「土人」や「ターサン」／＼を。体じゆう、干潟の砂を下口／＼に塗りまくつた。手も足もお腹も、お尻や顔までベトベトとくっつけて、身も心も、ほんもの土人になつたつもりでいた。そしてそのまま、干潟の上を力一杯駆けまわつた。潮だまりの中を、背よりも高くしぶきをハネ上げて突つ走ると、砂が

とけるように流れ落ちた。それがとつともうれしくて、愉快でならなかつた。深い所へ、飛び込みながらフツ倒れた時なんか、もう、「いっぺんにキレイサッパリ／＼」。

それを見届けると、「ニツ／＼するか」どおたあつ／＼と言つて笑いこけていた。

でも、それよりも、海草のほうがよく面白かつた。

谷津干潟には、その頃、藻場といつて海草がジャングルのように茂つている所があつた。波打ちぎわなど、藻がウズ高く積まれ、歩くとフワ／＼／＼していた。腰ぐらゐの深さの所など、あんまりたまつていたので、泳げなかつたのは勿論、足や腹、腰に藻がつつかえてしまつて歩けなかつた。ザブン／＼と水にもぐつて水面に体を出すと、藻がいっぱいからみついて、顔もわからなかつたほどだ。そんな時、僕たちは、「オバケだどお／＼」とか、「オシだあれだあ



／＼」なんて言い合い、ケラ／＼／＼笑いこけて、カワウソの如くかけめぐりはしゃぎまわつていた。

海草を、腰や首、肩に出来るだけいっばいまとわり付け、片手にフツボや貝がビツシリ付着した流れ竹を持つ。それが土人のヤリだつた。すつかり土人やターザンになつた僕たちは、踊り、とび跳ね、走り、体をくねらしては、叫び合つたのだ。

「キヤウホーツキヤホー／＼」  
「土人だあー／＼」  
「アオオオーアオオオー」  
「おどれええー／＼」  
なんて／＼あひ。

そんな時、赤銅色にやけた子供たちの肌は、潮に塗れ、ピカ／＼光つていた。藻から飛び散る水滴も、夏の陽でキラ／＼と輝つた。オチンチンも、潮風の中でゆれて

いた。それは、きつ／＼海草の匂いと、ジーンと鼻をつく潮の香りが、干潟の子供たちの心と体に、強くつたえるものがあつたからだ。





写真は久我栄子さんの作品

# 受賞おめでとう!!!

- ☆ニューアングル千葉 最優秀賞 久我栄子さん
- ☆習志野街かど写真コンテスト 最優秀賞 長谷川誠一さん
- ☆よみうり写真大賞 佳作 大滝俊隆さん

それぞれの写真コンテストで、3人とも谷津干潟をテーマにした作品で入賞されました。

今年最初の「ふかんど通信」の記事としては、あまり楽しい話題ではないのですが、どうしても書かずにいられません。

それは、あずまや「いそしぎ」が最近になってしばしば壊されることです。

この干潟南側の葦小屋は長い間、谷津干潟クリーン作戦や、バードウォッチングの人たちの基地となり、憩いの場所となってきました。それが、1月14日の日曜日に行ってみると、屋根のよしずははがされ、柱は傾き、屋根を支えていた角材は引き抜かれてなくなっています。すぐそばには、小屋をつくっていた丸太や角材で焚き火をした大量の灰が残っていました。酒盛りでもしていたと見えて、一升びんの割れたガラス破片がたくさん混じっています。

子どもがよく遊びに来る場所です。泥だらけの靴を脱いで、裸足で遊びまわる子どもも珍しくありません。早速、小さなガラスのかけらまですっかり集めて、安全な場所に捨てました。

「幸せの黄色いハンカチ」の旗を揚げる滑車付きの柱も傾いていました。

森田さんの話では、1月9日の火曜日、ここで焚き火をしている若い男性がいたそうです。「小屋を壊しては困る」と言うと、謝って、「建て直すときには手伝う」と言ったそうです。習志野市内に住む大学生で、失恋して、友達とヤケ酒を飲んでいたとも言ったそうです。

若い頃ならありがちなことかも



谷津干潟七友の会 長塚進吉(秋津3丁目)

しれませんが、自然観察会のお知らせや、クリーン作戦のお知らせが書いてある看板が立っているのです。壊して燃やしていいものかどうか、わからなかったのしょうか。

旗を掲げる柱を壊していたのも干潟の近くに住む中学生で、1月8日に、鋸をもって切っていたそ

うです。

もう一つ、1月14日に干潟の津田沼高校側の水路沿いに立てた2つの看板が、見るも無残に壊されました。悪意に満ち満ちていた壊された方であったことは、ガードマンさんの言葉借りるまでもありません。

今までも、看板や小屋が壊されたことは何回もありました。しか

し、たいていは小学生のいたずらくらいで、大人が、あるいは道具をもって破壊する意思をはっきり持って壊されるようになったのは最近のことです。

一昨年の夏には、高校生が「いそしぎ」の小屋のそばで花火をして、枯れた葦の屋根に火がついてアツという間に焼け、消防車が出

## みずもとから



みずもと自然観察クラブ 田中 広

私が初めて谷津干潟を知ったのは、今から約4年前のことです。みずもと自然観察クラブの五十嵐さんの車に同乗し、江戸川を渡り、市川を抜け、私のイメージする干潟は広大な東京湾の海の香りであつたが、案内された場所は四角に切り取られたような池のようでもあり、幼少時、北海道の原野で育った私にはそこだけがとても不自然な自然に映つた。これは一体何なのだろう。寡黙な彼は私に何を見せたいのだろうと、一瞬いろいろなことが頭を横切ったことを覚えてる。

十数年に渡り、干潟に捨てられたゴミを拾い続けていたのである。

70年以降の経済はまさに消費経済であり、私たち自身も消費社会にどっぷりと浸かっていた。捨てることよりも拾うことは何と困難な作業であつたらうかと、今更ながらに思うのである。

60年代以降、東京湾は次々に埋め立てられ、谷津も埋め立てられる運命にあつたのである。恐らくは存在できなかつた干潟が今、90年代にぽっかりと浮いたように残っている。そんな景観を目の前にして私自身も感動を覚えたが、それにも増して、やはり森田さんを始め谷津干潟を守ろうと努力している会の皆さんの持続的な活動に拍手を送りたい。

しかし、車窓から目を凝らして見ると、そこには多くの鳥たちがおり、私が今まで見たことがないようなシギやチドリの間たちが歩いているのであつた。ここが名前のとおり干潟であると感じたのは、車から降りて潮風を顔に受けた時で、そこは紛れもない海であつた。

昨今、環境保全の問題が国会でも取り上げられ、新聞には毎日のようにゴルフ場を初めとしたリゾート開発の記事が掲載されている。事実、リゾート法を隠れ蓑に森林の破壊が加速度的に進んでおり、非常に憂うべきことであるが、私たち一人ひとりが今こそ身近な生活環境にもっと目を向けていかなければならないのでは、と思うのである。

森田三郎さんを紹介されたのは、その後何度か干潟を訪れた後であつた。森田さんは夜勤明けでまだ寝ているようであつた。眠たそうにバジャマ姿で起きてきて、私達を快く歓迎してくれた。そして後

谷津干潟友の会のNさんが言った言葉思い出す。「俺たちはゴ

る騒ぎになりました。そのため、去年の夏は、小屋の屋根を葺くこともできず、暑い夏の間、よしずの屋根で我慢しなければならませんでした。

10年以上も前から、毎年、夏には葦の屋根が、バードウォッチャーや干潟を訪れる様々の人々に涼しい日陰を提供してきました。それでも火事になったことはなかったのです。

そういうえば、クリーン作戦のゴミを置いておく場所に、普通の家庭のゴミを置いていく人も増えました。

干潟に来る人が増えれば、こういうことも避けられないのかもしれない行動のために、自由にだれでも遊べた空間に柵ができ、鍵がかかり、次第に規則で縛られた管理された空間になっていくのは、残念なことです。

自分だけよければいい、自分の家の周りだけきれいな方がいい、と思っている人ばかりだったら、谷津干潟は残らなかつたでしょう。

だれでもが自由に楽しめる谷津干潟のために、皆さんのご協力をお願いしたいのです。



ミを拾うのが心から好きなんだよな。とくに理由は無いんだ。何の術いもなく言い切ったNさんの言葉は実に印象的で、清々しささえ感じられた。一つの事に理由を求めては何もできないだろう。愛すべき自然や、そこで生活する愛すべき人間たちがいたから干潟は残り、そして鳥たちがその地を訪れることを約束したに違いない。

干潟での自然教室が始まりもう半年が過ぎてしまつたが、この教室をきっかけに多くの子ども同士の交流ができることを願っている。そして、谷津干潟が将来的にも変わることをなく、渡り鳥やカニたちが安心して棲める場所であつてほしいと願うのである。

(谷津干潟自然教室指導員)

# ふかんど通信

発行 谷津干潟友の会  
習志野市谷津3-25-11  
TEL.0474-51-5044



1988年10月31日 朝日新聞社ヘリコプターから撮影 (提供：朝日新聞)

# 楽園の子供達

14

絵と文 森田三郎

## 赤の灯台と

## 白の灯台

ふたつあった。埋め立てで姿を消してしまったが、三十五年も前の昔、今の京葉紙埠頭ぐらゐのところにひとつ、赤の灯台。さらに津田沼より、ホンダの埠頭ぐらゐのところにもひとつ、これは白の灯台。

「あれがよお、赤の灯台 だべえ、んでよお、こっちに、白の灯台 があんべなあ……」と、土地のみんなも、ぼくたちも、このふたつの灯台をそう呼んでいたのだった。

見渡すかぎりの、はるか遠い干潟の沖にむかって、右の方には赤い灯の赤の灯台。そして左の方に

は白い灯の白の灯台があった。ふたつとも無人で、波間に浮かんでいて、大きくゆっくりとユラユラゆれていた。

夜、暗い海の波が、タツプタツプと音をたてて寄せる土手道や、家の前の、広い干潟の見える大きな横に登って、子どものぼくは、ぼんやりと、そしてぼつねんと、この赤の灯台と白の灯台を見ていたのであった。子ども心にも、そうしている、なんだか不思議と遠い見知らぬ何かに誘われ、心がきれいになり、ちょっと淋しく、ちょっとこわい、そしてもの悲しい感じになったものでした。

そのころ、赤の灯台と白の灯台は、これといって何の目印もなかった広い遠浅の海で、場所を話したり、いる場所の方向を教えるの



に、よくみんなの口へのぼっていた。

「三郎、いいかあ、あすこんこの灯台はなあ、おっかねえとこだかなあ、行ったり近づいたりするんじやねえどお。潮も、ええっぺえ速く流れてんし、……」

んでなあ三郎う、お前があすこに行ったらなあ、昔い海で死んだ人の霊がよお、淋しがってお前を仲間にするべえってんで、海ん中に呼んでよお、足を引っ張んだかななあ……」

と、母はときどき言った。近所の人もほとんど近づかなかった。でも、ぼくは、幼年から少年になったとき、とうとう行った。干潟の突先から約百五十メートル沖、早い潮流の中、思いっきり斜めに泳いだ。とても怖かった。水の中で汗がたっくたっくしている貝、いかつい赤糸ひた鉄骨に手をかけ、灯台によじ登った。夏がすみの彼方のぼくの家の方を見て、「ヤッホー」と叫んだ。

## ラムサール条約に

## 向けて

環境はとうの昔から、地球生成の時から国際化している。人間が勝手につくった国境や境界線に関係なく。

水も空も、そして谷津干潟に飛来する数千の渡り鳥たちも。どこの鳥が国旗をおっ立てて飛んでくるものですか。

国際化が叫ばれる昨今、習志野市が自信と誇りをもって国際舞台に押し出せるもの、街の中に海が出前してくれる、国内でも、世界でも殆どその例を見ない、幾千ものシギ・チドリ

の群舞する谷津干潟。わが習志野市から世界へ——。より良きプレゼントと成し得るかどうかは皆さん次第です。

地球環境の危機が叫ばれているなかで、いま私たちが最も身近なこととして考えなければならぬのはゴミ問題ではないでしょうか。  
手軽で便利な生活にあまりにも慣れ過ぎて、あなたの生活はゴミ太りになってはいませんか？  
どうすればゴミを減らすことができるか、そんなことは皆さんよくご存じでしょうが、こんなゴミに対する考え方もあるということで、先般、月刊「市政」(全国市長会発行)に掲載された森田三郎さんの一文を、この号から3回に分けてご紹介します。

# 「ゴミ問題」を考える

— シリーズ その1 —

森田三郎

## 「ゴミを捨てるな」

「ゴミを捨てるな」。こんな事は誰でも知っている。わかっている。で、そうするか、あるいははできるかというたら、それができないのである。

今、ゴミが大きな社会問題となっている。でもそれは、実は簡単なことなのである。つまり、「ごうしてはいけない、あおしてはいけない」と、理屈ではみんなわかっている。ちゃんと頭では知っている。ところが、行動が伴わないのである。つまり、知っててできないのである。もし、ペーパー試験をやったら、一〇〇人が一〇〇人とも、ほぼ満点の答えがええてくるだろう。ところが現実には、できない。やらないのである。なんのことはない、小学校低学年の子どもでもわかることが、人生経験の長い、立派な大人のおじさん、おばさんができないのである。

## 大人がやらない

なんてったってかんでったって、いくら偉そうなことを言ったって、大人がやらなきゃダメだ。要は、それだけのことで、やらなきゃダメだ。私たち大人がやらないで、いくら人に、とくに子どもたちに、ああだこうだと理屈をまくし立ててもダメだ。役に立たない。なぜなら、大人がゴミを出しているんだから。バカバカしく安くゴミを投げ捨てているんだから。大人が、後ろ姿で、背中を教えるんだから。その後ろ姿を見て育つ子どもが、やるわけないじゃないですか。なんてやるもんですか。

子どもたちにとっては、自分の身の回りのすべて、森羅万象のことごとくが、そのそのままだ。生きた教科書である。これはこうだ、あれはああだというふうな目に入るものすべてが、生きた。絵とは、ある。メッセージである。またサインである。残念ながら、そんな

# 谷津干潟自然教室 満一歳に

谷津干潟の自然をもっと多くの人に知ってもらいたい。そんな願いで、葛飾区の水元自然観察クラブの協力で始まった「谷津干潟自然教室」が満1歳になりました。「鳥」「植物」「虫」など、毎回テーマを決めて教室が開かれ、クイズ、ゲームなど、大人も一緒になって自然と仲良くしています。毎回20~30人が参加していますが、遠く市川市や都内からも来てくれるんですよ。飛び入り参加自由です!!。毎月第2日曜日、10時半からお弁当持参で干潟の南側で開かれています。ぜひお仲間になりましょう!



# 谷津小学校がクリーン作戦

谷津小学校では毎年、4年生になると、社会科の授業で東京湾の開発について学びますが、その授業の中で谷津干潟のことも採り上げられて、子どもたちは一度は干潟のゴミ拾いを体験するのが恒例になっています。今回クリーン作戦を実行したのは、4年生のとき干潟に来た子どもたちが、5年生になって、学年での行事として何に取り組もうかと考えたとき、再び谷津干潟のクリーン作戦をしようということになって、お母さんたちとともに干潟にやって来たものです。さすがにみんな経験者として、ドロの中を歩くのもゴミを拾うのも手慣れたもの、護岸にはアッという間にゴミ袋の山が築かれていきました。自分で拾ってみて、拾うのもさることながら、その前に、捨てる努力をしようという気持ちでくれればいいんですけどね。



## ゴミの言い分

私は、ゴミにも言い分があると思う。まあ、もしゴミにも心があり、言葉があるとしたら……。たとえば、いま原稿を書いているこのボールペン。インクがあって、使えるときはほとんど使おう。それで、インクがなくなると書けなくなり、その用をなさなくなる。ボールペンと捨てる。つまり、ゴミと称するモノになるわけだ。ゴミの誕生だ。でも、このボールペン、物質的科学的にはなんら変わったわけではない。用をなさなくなっただけだ。役目が終わったからもういらぬよ、というわけだ。なにも腐ったわけでも、モノの性質が変化したわけでもない。人間にとってその働きが終わっただけである。機能的なゴミ、なのだ。機能的ゴミといえは、私たちの身の回りになんと多いことか。

# 森田さんの谷津干潟苦闘記

## 「どろんこサブウ」を出版

作家・松下さん  
書いた児童図書「どろんこサブウ」が講談社から発売された。  
小学校中学年以上向きで、森田さんが16年前に谷津干潟の清掃を始めたいきさつや、森田さんの子ども頃

# 「ゴミ拾い人生」が本に



89年に第23回吉川英治文化賞 第6回朝日森林文化賞を受けて受賞した森田三郎さんの谷津干潟での活動



の干潟での思い出、ゴミの収集を求めて市、県、国の役所と交渉したときの模様など、谷津干潟での苦闘ぶりが描かれている。  
俳優の森繁久弥氏も推薦文を寄せ、「森田さんのおまにすばらしい行動に感動した私も、小額のカンパをしたのを思い出す」と書いている。  
「どろんこサブウ」の著者松下竜一さんは、大分県中津市に在住し、九州電力の豊前火力発電所の建設や周防灘の埋め立て反対運動、反原発運動などをしながら、ルポルタージュや児童文学を書いている作家で、講談社ノンフィクション大賞を受賞している。  
松下さんと森田さんは15年前、自然保護運動を通じて知り合い、森田さんは松下さんの運動のグループに招かれて、中津市で講演を

# ふかんど通信

発行 谷津干潟友の会  
習志野市谷津3-25-11  
TEL.0474-51-5044



園内でスイカを食べてはいけません……なんて言わないだろうな？

## ボロは着ても

稲毛に海浜公園がある。そこでは年中、スニーカーがどなっている。園内でボール遊びをするな、草木を痛めるな、生き物をとるな……。必要なかもしれないが、不愉快だ。

谷津干潟が公園になる。やっぱりそんな公園になるのだろうか。ここで子どもたちは走り回り、取っ組みあい、泥だらけになって遊んでいる。子どもだけではない。ゴミ拾いのボランティアたちも遊んだ。アシ小屋を作り、水上観察舎を作り、泥の上をサーフボードで滑り、大人が遊んだ。

立派な観察舎ができる。立派な園路ができる。立派な観察テラスができる。それはそれで嬉しい。しかし、本当のことを言おう。今のままがいい。

公園化することが、保存の前提だった。大蔵省財産から環境庁財産になったのも、国設鳥獣保護区になったのも、すべて公園化計画から始まった。だから仕方ないのか？

流木のベンチとテーブル、アシの葉の屋根の小屋、何にもない野原。だれも偉そうな口調で小言をいわない野っばらがいい。(長)

# 楽園の子供達

15 絵と文 森田三郎

## 母のこゝろば

—三郎、かあちゃんはや、お前が夕方暗くなってから、海から遊んで帰って来んだろ、そんで垣根のあっちから、「かあちゃん、ただいま」って言ってな、ニツと笑うんだよな。まっ暗い中よ、お前の目と歯だけが白くってつっ立ってんだよ。かあちゃん、ギョッとしてよ、がっかりしちゃうんだよな、これがわたしの生んだ子かしら、って思ったよ。

—お前は、かあちゃんよ、よくぶんなぐられたって言うけど、お前のイタズラってきたら、一通りじゃなかったんだ。んだけどなあ、お前が憎くてぶったことなんか一度だってねえど。あん時、貧乏してたる。着るもんなんか、

あんまりなくなってるな。んで、かあちゃん、いろいろ工面してよ、朝ちゃんと服を着せてやってな、夕方疲れて仕事から帰って来んと、お前はきつたなくなってる、服なんかカギ裂きたらけでよ……。わが子ながら、乞食か土人みてえなんだよな……

垣根の木戸んそばにはよ、お前がしでかしたイタズラに文句言うべえと思ってるな、近所の人が立って待ってたんだよな。「お宅のサブちゃんを野放しにしないでくれ」なんて、何回言われたか分かんねえんだ。包丁なんて買ったって、すぐノコギリみたくしちゃうしよ、台所の桶だってザルだってみんなデコボコで生臭せえんだもん……。

—すげえかったんだから、お前

は……。んだから、かあちゃんヒステリーなっちゃってな、手近にあるもん取って、叩いたんだよな。そんなことだから、うちのハタキだってホウキだって、すぐぶっくれちゃって、まぢょうな(ちゃんとした)の意味の方言もんねえんだよな。しよっっちゃうだからかあちゃんの手も痛えしなあ……。—んでもかあちゃんな、お前が疲れて死んだように寝ているその顔見るとな、泣きながら寝たもんだから、涙の痕が残ってたんだよな。んで、考え



ちゃったんだよ。あんなにまで、なんで怒ったのかって……。お前がこんなにまで遊ぶのも、うち帰って来ても、かあちゃんいねえから、母親として何もしてやれねえしよ、オヤツだって、遊ぶオモチャだって買ってやれなかつたもん……。親の目から見てもお前はすいぶん殺生なことをしたけどよ、そんなお前に、アレもするな、コレもするなって言ったんじや、この子はいったい何を遊んだらいいのかわかって……。—ときどき、お前はよ、夢見て泣いてよ、かあちゃん、せつなかつたど……。もとはと言えば、みんなかあちゃんだったんだよな。そしたらよ、かあちゃんよ、涙が出て来ちゃってな……。

「この世にオレを生んでくれたこと、一言でいえば、それを感謝している。ところで逆に、母はどう思っているのだろう。」

# 「ゴミ問題」を考える

—シリーズ その2— 森田三郎 (全国市長会発行 月刊「市政」より)

ゴミについていえば、個人も企業も行政も取組がたりない。とりわけ学校教育の中に、がっしりと組み込んでほしい。思うに、私たちは今までどれほどのゴミに関する教育を受けてきたろうか。  
無理もない。いままではなんとか、埋めるか、捨てるか、隠すかして「どっかへやっちやえば」よかった。  
その「どっかへ」がだんだんとできなくなってきた。否が応でも、ゴミと鼻を突き合わせるのを嫌う方が、それを回収し、活かし、解決する方を圧倒してきた。今もそうだし、そのギャップは開く一方だ。

環境問題が、ゼニにならない、票にならないという状況ではだめだ。ゼニにも票にもなるようではいけない。環境問題は、もともとと生臭く、骨っぽくて、ドロ臭くて捨てるのも人間、拾うのも人間だ。タバコや空き缶、空き瓶の投げ捨て、タンやツバを路上に吐くことに罰金や罰則を設けなくてはだめだ。過激だとか罰金の窓から火のついたタバコを投げ捨てたり、水辺や草原にゴミを捨てる方が、現実的からいえば、はるかに過激ではないのか。

## もつとドロ臭く、骨太に

環境問題が、ゼニにならない、票にならないという状況ではだめだ。ゼニにも票にもなるようではいけない。環境問題は、もともとと生臭く、骨っぽくて、ドロ臭くて捨てるのも人間、拾うのも人間だ。タバコや空き缶、空き瓶の投げ捨て、タンやツバを路上に吐くことに罰金や罰則を設けなくてはだめだ。過激だとか罰金の窓から火のついたタバコを投げ捨てたり、水辺や草原にゴミを捨てる方が、現実的からいえば、はるかに過激ではないのか。

## 行動こそ意見ではないか

環境問題が、ゼニにならない、票にならないという状況ではだめだ。ゼニにも票にもなるようではいけない。環境問題は、もともとと生臭く、骨っぽくて、ドロ臭くて捨てるのも人間、拾うのも人間だ。タバコや空き缶、空き瓶の投げ捨て、タンやツバを路上に吐くことに罰金や罰則を設けなくてはだめだ。過激だとか罰金の窓から火のついたタバコを投げ捨てたり、水辺や草原にゴミを捨てる方が、現実的からいえば、はるかに過激ではないのか。

## 子どもを恐れる

子どもたちが、空き缶や空き瓶を拾ってきたら、たとえ十円を報酬として与えたらどうか。その代金は私たちの税金と企業が負担するのだ。報酬を与えるのは教育上よくないというのか。それなら、いたるところに散乱している空き缶、空き瓶の現状は、子供たちの目に何を教えるのだろうか。



「町をきれいに」とか「海をきれいにしましよう」という看板を見る。もっと具体的に、直接的に訴えてはどうだろう。「ゴミを出すな、捨てるな、持って帰れ」と。  
美しく、とか「きれいに」というのは、標語としてはいいかも知れない。なんとなく上品で、恰好も印象もいい。だが現実問題、これで太刀打ちできるだろうか。できない。勝ち目はない。わかっているやらないんだから……。



「町をきれいに」とか「海をきれいにしましよう」という看板を見る。もっと具体的に、直接的に訴えてはどうだろう。「ゴミを出すな、捨てるな、持って帰れ」と。  
美しく、とか「きれいに」というのは、標語としてはいいかも知れない。なんとなく上品で、恰好も印象もいい。だが現実問題、これで太刀打ちできるだろうか。できない。勝ち目はない。わかっているやらないんだから……。

# クリーン作戦3000回

「町をきれいに」とか「海をきれいにしましよう」という看板を見る。もっと具体的に、直接的に訴えてはどうだろう。「ゴミを出すな、捨てるな、持って帰れ」と。  
美しく、とか「きれいに」というのは、標語としてはいいかも知れない。なんとなく上品で、恰好も印象もいい。だが現実問題、これで太刀打ちできるだろうか。できない。勝ち目はない。わかっているやらないんだから……。

表彰式で津川雅彦さんから祝福のスピーチを受ける森田さん (1990年11月25日)



「自由が丘チルドレンミュージアム」館長で俳優の津川雅彦さんから、「神様の創りたもうた大自然を愛し、守ることのできるサンタクロスです」として、森田さんに1990年のサンタ・オブ・ザ・イヤータ賞が贈られました。また、夢とやさしさとロマンと幸運を持つ人としてInternational Star Dream Clubの会員として認定され、山羊座に輝く星が一つ、Star of Saburo Moritaと名付けられました。星の位置は赤経21時06分00秒、赤緯-17度15分、光度は4等星。星の選定はルネ・ヴァンダル氏、森田さんの出生ホロスコープにもとづいて選んだそうです。



「自由が丘チルドレンミュージアム」館長で俳優の津川雅彦さんから、「神様の創りたもうた大自然を愛し、守ることのできるサンタクロスです」として、森田さんに1990年のサンタ・オブ・ザ・イヤータ賞が贈られました。また、夢とやさしさとロマンと幸運を持つ人としてInternational Star Dream Clubの会員として認定され、山羊座に輝く星が一つ、Star of Saburo Moritaと名付けられました。星の位置は赤経21時06分00秒、赤緯-17度15分、光度は4等星。星の選定はルネ・ヴァンダル氏、森田さんの出生ホロスコープにもとづいて選んだそうです。

「自由が丘チルドレンミュージアム」館長で俳優の津川雅彦さんから、「神様の創りたもうた大自然を愛し、守ることのできるサンタクロスです」として、森田さんに1990年のサンタ・オブ・ザ・イヤータ賞が贈られました。また、夢とやさしさとロマンと幸運を持つ人としてInternational Star Dream Clubの会員として認定され、山羊座に輝く星が一つ、Star of Saburo Moritaと名付けられました。星の位置は赤経21時06分00秒、赤緯-17度15分、光度は4等星。星の選定はルネ・ヴァンダル氏、森田さんの出生ホロスコープにもとづいて選んだそうです。

「自由が丘チルドレンミュージアム」館長で俳優の津川雅彦さんから、「神様の創りたもうた大自然を愛し、守ることのできるサンタクロスです」として、森田さんに1990年のサンタ・オブ・ザ・イヤータ賞が贈られました。また、夢とやさしさとロマンと幸運を持つ人としてInternational Star Dream Clubの会員として認定され、山羊座に輝く星が一つ、Star of Saburo Moritaと名付けられました。星の位置は赤経21時06分00秒、赤緯-17度15分、光度は4等星。星の選定はルネ・ヴァンダル氏、森田さんの出生ホロスコープにもとづいて選んだそうです。

「自由が丘チルドレンミュージアム」館長で俳優の津川雅彦さんから、「神様の創りたもうた大自然を愛し、守ることのできるサンタクロスです」として、森田さんに1990年のサンタ・オブ・ザ・イヤータ賞が贈られました。また、夢とやさしさとロマンと幸運を持つ人としてInternational Star Dream Clubの会員として認定され、山羊座に輝く星が一つ、Star of Saburo Moritaと名付けられました。星の位置は赤経21時06分00秒、赤緯-17度15分、光度は4等星。星の選定はルネ・ヴァンダル氏、森田さんの出生ホロスコープにもとづいて選んだそうです。

# 楽園の子供達

16

絵と文

森田 三郎

## すだ 簀立て

干潟の中に「よしず」を立てて  
 おいたものです。ヨシを堀のよう  
 にして囲みを作りました。入口か  
 ら入ってきた魚は、ヨシのため逃  
 げられなくなってしまふのです。  
 入口のまわりにも、できるだけ入  
 口の方に魚が泳いで集まって来や  
 すいように、つい立てのようによ  
 シを立ててありました。

私がおぼえているものでは、今  
 の「習志野トラックスセンター」の  
 ところのものが最後までありまし  
 た。

簀立てでとれる魚は、当時その  
 辺にすんでいた魚の大部分がとれ  
 ました。ウナギやワタリガニもと  
 れました。

簀立ての入口は、海の方ではな

く、逆の、陸の方にありました。  
 どうしてかというと、魚は、満ち  
 潮とともに潮の流れに乗って泳い  
 できます。そして今度は、引き潮  
 になったときも、潮の流れに乗っ  
 て沖の方へ泳いで帰って行くこと  
 するからです。

入口から「よしず」の囲いの中  
 に入ってしまった魚は、潮が引い  
 ていく沖の方へ泳いで行くことす  
 るのですが、「よしず」があるた  
 め、そこでつかかえてしまふわけ  
 です。出ようとどろどろせずして、あ  
 ちこち泳ぐのようですが、そのう  
 ち、潮がすっかり引いて、水がな  
 くなってしまいます。つまり「行  
 きはよいよい、帰りはこわい」と  
 いう、そんなわけです。

潮が引いた後に行ってみると、  
 魚たちは、干潟の地面の上や、た

まった海藻、あるいは浅い水の中  
 にいるので、どんな人にも網や手  
 でつかまえられるのです。



とくに、たまった海藻の中には  
 たくさん魚やカニがじっとして  
 いるのです。ぼく達子どもは、

簀立て  
 干潟の中によしずを  
 立てた。潮が引いた  
 とき、魚は、この中へ  
 入ってほら。

いろんな種類の海藻が集まってた  
 まっている中から、きつい海藻の  
 匂いをかきながら、手でやたらと  
 かき分けてつかまえるのが大好き  
 でした。

ぼく達は、海藻の上でデングリ  
 返しをやったり、山のように積ん  
 でもぐったりしながら遊んでいま  
 した。また、海藻をいっぱい抱え  
 て、ぶっつけ合ったり、空に向か  
 って投げたりしながら、はしゃぎ  
 まわっていました。

そのころ、「簀立て」という名  
 前は知りませんでした。本当は、  
 これは、船に乗って来た人が、お  
 金を払ってやるものでしたが、ぼ  
 く達はお金を払ったことがありま  
 せんでした。だれにもいけないと  
 いわれなかったし、だいいち、そ  
 のころ、お金をもって海に行くな  
 んてことは、考えたこともありま  
 せんでした。魚の入れ物もなかつ  
 たので、みんな逃がしました。

## 生命の海

この写真は、埋め立て前の谷津干潟のあたりの写  
 真です。そんな昔の、「楽園の子供たち」の海が見  
 たくなって、三年前の春、谷津干潟クリーン作戦の  
 仲間たちで、木更津市の金田海岸に行きました。

はるか彼方まで干上がった海。波紋の形が残った  
 砂の上をテクテクと歩いていくと、春の日が暖かく  
 て、汗ばんで来ます。沖の方で、海苔をとるために  
 林のように立てられた竹の棒が、かげろうにユラユ  
 ラと揺らめいていました。

ふだん谷津干潟しか見ていない私たちは、あまり  
 の広さにびっくり仰天。「どこまで行ったら波打ち  
 ぎわがあるのだろう」と思って、歩きだしました。

まっ平らに見える干潟も、歩いてみると、わずかな起伏がありました。ほんの二、三十センチの深  
 さの潮だまりが何か所もあります。そこにはアオノ  
 リのようなきれいな緑色の海藻が生え、小さな魚が  
 泳いでいます。稚魚は、こういう浅瀬をゆりかごに  
 して、大きくなっていくのだそうです。アサリもカ  
 ニもたくさんいました。

私たちが住んでいる埋め立て地には、こんなにあ  
 くさんの先住者がいたのです。

許して下さい、小さな命たち……。

(長)

ふかんど通信 No18

発行 谷津干潟友の会  
 習志野市谷津3-25-11  
 TEL.0474-51-5044





# 市会議員うちあけ話

ズブの素人が市会議員になって、何を見、何を感じ、何をやったか。『どろんこサブウ』の奮戦記。

——四年間の感想を一言で。  
森田 中身が濃くて、少しくたびれました。やろうと思えばいくらでもやることはあるし、サボろうと思えばいくらでもというのが市会議員。  
——やっぱり森田さんもセンセイと呼ばれているわけ？

森田 市の職員なんかにもセンセイはやめてくれ、といったんだけど俺一人のときはいいが、他の議員もいるところだとそうもいかないっていうんだね。実際に、当選したらすぐ、市職員に「これからはセンセイと呼んで欲しい」といったエライ議員さんもいます。ある部長なんか、「別に慣習でそう呼んでいいだけで、尊敬してセンセイと呼んでるわけじゃありません」って、はっきり言ってたよ。役所としては何でもいから懐柔しておきたいということなんですよ。

## ★ボランティア議員のすすめ

——いちばん驚いたことは。  
森田 何をやっていようが決まった期日に歳費が振り込まれることかな。議員歳費は何期やっても同じで、月に三万五千円。本会議とか委員会に出席すると一回二〇〇〇円の報酬がつく。俺の場合、毎月歳費と報酬で手取りが二六、二七万円くらいになる。そのほかにボーナスが三月、六月、一月と三回合計で手取り一三〇万円くらいかねえ。こんなにもらっていいのかな、と思っています。

——しかし、その金額じゃ、市議員だけの収入で家族抱えて食っていくのは難しいんじゃないですか。  
森田 歳費とか議員報酬ってのは給与とは法的に違うんです。給与は生活のためのものだけど、歳費とか報酬は、謝礼みたいな性格のもんだから仕方ないところもある。つまり、議員

は給与とは法的に違うんです。給与は生活のためのものだけど、歳費とか報酬は、謝礼みたいな性格のもんだから仕方ないところもある。つまり、議員



さてスーツを持って…… タクシー運転手から議員に早変わり

つてのは生活費を稼ぐ職業ではない。俺はむしろ、議員歳費をうんと少なくして、ボランティアにしちゃったら、と思っている。谷津干潟のクリーン作戦みたいだ。  
——選挙が近いと、事前運動のピラクシーやってくるけど。  
森田 やろうと思えば、口きき料とか、紹介料とかの金は取れるのかもしれないけど、業者に頼まれて市の計画を聞き出してやるとか、資料を手に入れて報酬を貰うとか。業者の利益になるような質問をするとか。  
——議員の仕事ってどのくらい忙しいんですか。  
森田 議会だけを言えば、定例議会は三月、六月、九月、十二月の四回で、期間は三週間。そのうち休会です。市側が質問の資料整えたりする日があるから実質は三分の一が休会です。その他に特別委員会とか常任委員会とか

各種の審議会とかあって、それが本会議と同じくらい時間をとられる。政党とか会派に属していれば、代表者だけ出ればいいのもあるんですが、俺は一人会派だから、会派代表者会議とか議会運営委員会とか全部出る。  
——欠席はしたことない？  
森田 俺は皆勤しました。タクシーと干潟の掃除と三足のワラジだから忙しい。タクシーの勤務時間中でも市民や職員からの無線がよく入る。議会の時間になると、無線回送の札立てで駆けつける。札立ての忘れて呼び止められて謝ったこともある。乗車拒否です、すみません、はい。  
——それでもタクシーやっていると議員活動にも役に立ってます。道路行政には敏感になるしね。議員になると選挙のとき以外、あんまり頭下げなくなると、タクシーみたいなサービス業やっていると、普通の市民感覚でものを、忘れようがない。「あんだ議員なんだから、タクシー代まけろ」っていわれたこともあるけど。

## ★最高当選への反発

——質問なんかは？  
森田 一般質問は全部やった。一年に二、三回しかしない人もいるんじゃないかな。とくに会派に入ってるや、しなくてもすんじやう。  
——前回の選挙では最高点だったわけど、仲間の議員さんたちになんかいわれた？  
森田 いわれた、いわれた。マグレとか、取りすぎだとか。確かにマグレかも知んないけど。正直、敵意みたいなもんは感じるね。保守も革新も関係なし。去年も、議会運営委員会で、たまたまドアのそばへ座っていたら、保守系の某議員から「運転手さんドア開けて下さいよ」って言われた。

## ★俺はスロースターター

——初めのうち、とまどいは？  
森田 正直、議案書みても予算案みてもよくわかんなかった、数字だらけで。わかるようになるまで二年半ぐらいいかかった。俺はスロースターターですから。大体、新米はそんなもんじゃやないのかな。みんなそんなこと言わないで何もかも分かってるみたいな顔してるけど……。  
——自分が知りたいこと、市民から頼まれたことでも、市役所どころへ聞きにいったらいいか、わかんなくて、小沢さんとか、立崎さんとか先輩に教えてもらってました。(続く)

——初めのうち、とまどいは？  
森田 正直、議案書みても予算案みてもよくわかんなかった、数字だらけで。わかるようになるまで二年半ぐらいいかかった。俺はスロースターターですから。大体、新米はそんなもんじゃやないのかな。みんなそんなこと言わないで何もかも分かってるみたいな顔してるけど……。  
——自分が知りたいこと、市民から頼まれたことでも、市役所どころへ聞きにいったらいいか、わかんなくて、小沢さんとか、立崎さんとか先輩に教えてもらってました。(続く)

# 「ゴミ問題」を考える

—シリーズ その3— 森田三郎 (全国市長会発行 月刊「市政」より)

昨年、C・W・ニコル氏の講演が船橋市内のホテルで開かれた。私も招かれて聞きにいった。氏は講演の中でいろいろ話されたが、最後に、握りこぶしを振り上げて、どんな小さなこと、どこであっていいから、「アクション、アクション」と、半ば叫ぶようにして力説していたのが印象的だった。私は共鳴した。共鳴しながらいろいろな場面を思い出していた。  
千葉県習志野市の谷津干潟。私はここで、昭和四九年からゴミを拾い続けてきた。私が子どもの頃は、ここで潮干狩りや海水浴が行われ、ノリやアサリが豊富な遠浅の海だった。しかし、高度成長期に埋め立て工事が始まり、四方を陸地に囲まれてしまった。それと共に周辺の開発が進み、団地やマンションが相次いで建設され、人口が急増した。

## ゴミがゴミを呼ぶ

いっしょか少しづつ、それもほんの少しづつどこからともなく、誰からともなく、いろいろなゴミが捨てられた。あちこちにゴミの山ができてきた。するとそれを崩し、あちこちに散らしては低くし、またゴミが積み重なっていった。  
ゴミがゴミを呼ぶということ、後で体験

で知った。ゴカイやカニ、水辺の草など、干潟の地面で生きるものは、上をゴミでふさがれているのであった。干潟が呼吸できなくなっていく。  
やがて、近所の住民から、臭くて汚いからどうにかしろ、埋めてほしいという声が出てきた。泥や砂が腐り、ヘド口状になって、ピンク色や緑色をして、ゴミを掘り起こすと悪臭が鼻をついた。臭いから、汚いから埋めろというのは、それだけをとったら一理あると思った。  
高さ四桁の堤防よりさらに高くなったゴミの山の上から、私は干潟を見渡した。まわりを埋め立て地に囲まれ、悪臭とゴミだらけの子どもの頃の谷津干潟がかわいそうだった。野鳥の観察会に参加したり、谷津干潟をどうにか残してくるよう役所へも行った。何度か干潟のそばに立ち、その現実の姿を見ながら、自問自答した。

今の私は、要求したり、お願いしたり、意見を述べたり、あるいは観察しているだけの人間ではないか。見ろ、見え、「もし、お前が干潟だったら何をしたいか。身を干潟においてみる……」と。他に解決を求め、干潟の現実を嗅いで淋しく思っている自分が、くやし、憤りを感じるようになった。  
人や世間が、ふるさとの干潟が自分に何を

ゴミを拾いだした。臭くて汚いから埋めろというなら、きれいにすればいいだろう、という考えであった。  
ゴミの引き取りは全て断られた。拾うより捨てる方が圧倒的に多かった。そんな中でも拾った分だけ減るからと思った。ゴミの投棄は、注意しても看板を立てても、止まらなかつた。拾う方と捨てる方のイタチごっこだった。拾っているすぐ隣で投げていく毎日だ。二年、三年とたつうち、あることに気がついた。捨てるゴミの量が減っていくのだ。私は思っていた。初めの月に一〇〇拾うと一〇〇出す。次の月は一〇〇拾うと、それが九九になる。次の月は九八。さらに続けていくと九九、九六……と、そんな具合に、差額でかきだ分だけ、きれいになっていく。その間の、気遣い、売名行為、土人などの、いろいろな中傷は、「社会的・精神的税金」だと思ふようになった。(続く)

谷津干潟 探鳥のしおり  
県が新しいパンフレットを作りました。ご希望の方は、習志野市公園課あるいは、日曜日午後、谷津干潟南側のおずまや「いそしぎ」まで。



# ふかんど通信

発行 谷津干潟友の会

習志野市谷津3-25-11

TEL.0474-51-5044

『週刊読売』1990年7月29日号より



## 楽園の子供達 17

絵と文 森田 三郎

### 体操ガニ

「イチニツ、イチニツ」

干潟には、小さなかわいらしいハサミを上下に振っているカニの群れがいた。

ぼくたちは、体操ガニと呼んでいた。その数は何十何百万とも知れず、干潟の表面がモゾモゾ動いているようだった。

ジーと見つめていると背中がゾクゾクしてきた。足元からカニがモゾモゾはいあがってくるような気がした。ジーと耳を澄ましてみると、耳元をかすめる潮風の、かすかなシュー、シューという音に混じって、ジワジワ、ジワジワと小さな重みのある音が、そこいらじゅうから、湧きあがるように聞こえてきた。

ぼくたちは、体操ガニの群れを見ながら、干潟の沖に出た。貝や魚や、カニをとり、干潟をころけまわったり、泳いだりして一日中遊んだ。

夕方、満ちてくる潮に追われて帰るときも、体操ガニの群れの中を突っ切って帰るのだった。砂地にふり降ろすハサミの音が、おしゃべりをしている声のように聞こえる。

ぼくは、体操ガニがどうして体操するのか知りたかった。ある日のこと、ガキ大将のマーちゃんが体操ガニがどうして体操するのか教えてくれた。

「ほらあ、サブウ見てみん、みんな体操してんべえ。どおして体操するか知ってんかあ？」

「うーん、なんでなのお？」  
「あれはなあ、こうやって体操すれば、潮来んと思ってるだどお。潮来んと思ってるだどお。」

ほら、じっとしてて見ん、潮来んのがわかるから」  
「ふうん、じゃあみんな体操すればあ、潮来んと思ってるだあ……」

海で遊んで帰るぼくとマーちゃんやんのやけ肌、沖からの風がやんわりと当たって気持ちよかった。

すげえと思った。どうしてこんな小さなカニが、こうやって体操すれば潮が来る、それを知っているのが不思議だった。

マーちゃんはまわりを指差しながら、「ほれえ、サブウ見てみん、わかかってやってんだからあ。」

「潮来い、潮来い、ってな」  
子供だったぼくたちは、ほんとうにそう思っていたのだった。

ぼくたちが歩いていくと、次々と砂地の中に姿を消し、通り過ぎると再びソロソロと姿を現して体操していた。



(この用紙は再生紙を使用しています)

「ジワジワ、ジワジワ」

小さな、重みのある音が、後ろから追いかけてきた。ぼくは、思わず後をふりかえった。

「イチニツ、イチニツ」  
ぼくの気持を知っているかのよう、体操ガニは、ハサミを上げたり下ろしたりしていた。

そして、ぼくとマーちゃんの背中の方、沖からは、ゆっくりと見渡すかぎり、上げ潮の最前線が、岸に向かって夕日に光りながら、進んで来るのだった。

### 私たちの体の内なる環境

森田 三郎

私たちは地球を食って生きている。たとえば、ある魚や野菜を食うということは、その魚や野菜が育ってきた環境を、丸ごと、食うということである。食物連鎖の例にもあるように、人体は地球上にあるすべてのもので作られている。万物において、それらを構成している物質原子がめぐりめぐって、今、この体を作り、機能しているのである。

たとえば私の体を作っているあるものは、ある時は草むらの中であぐま虫であったし、ある時は朝もやであったし、また、ある時はアルプスの雪であり、新緑の若葉を作っていたのである。

実に、私たちの体は環境そのものである。環境とは、私たちと離れた、別の、単なる外部を取りまくものではない。そして、その私たちがなる環境は、歌い、祈り、怒り、泣き、思い、活動する、生ける環境である。

だから、暮らしを守るということの最大の眼目は食いのことを守ることであり、それが、環境を守ることである。

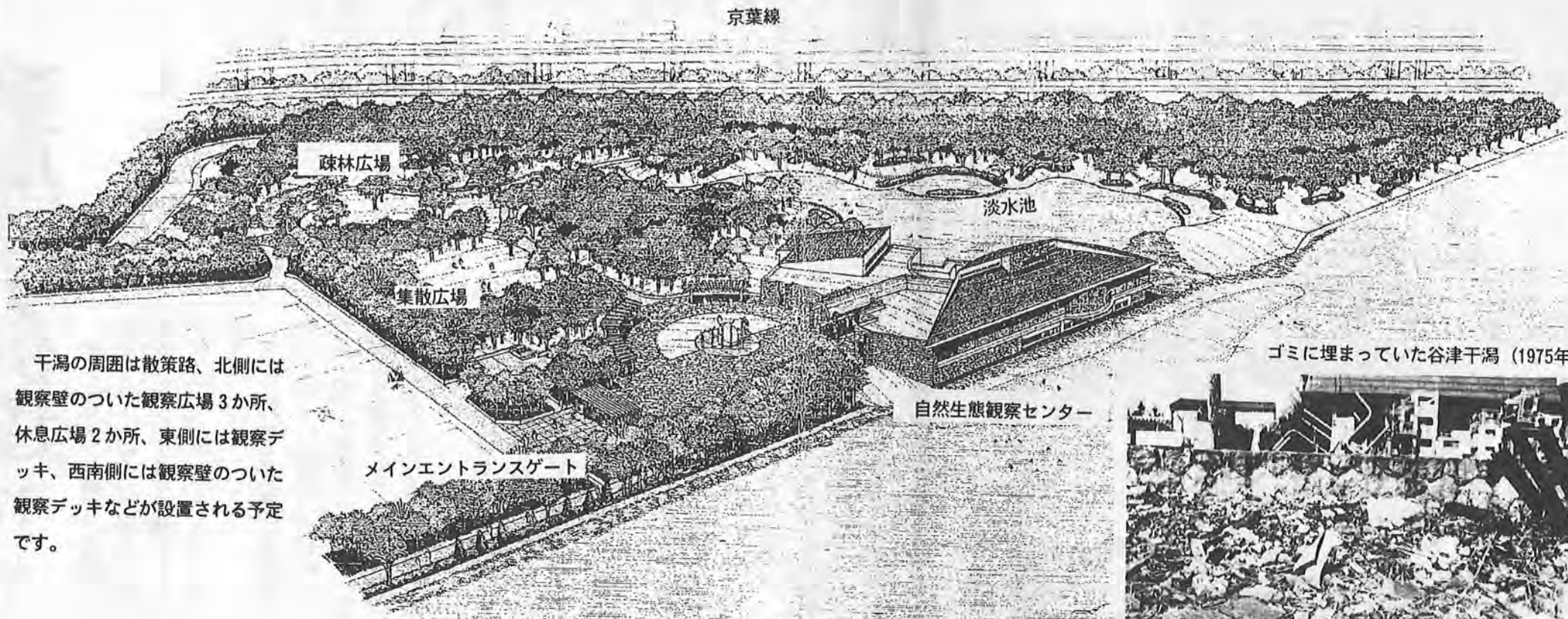
私は谷津干潟のこみを拾い続けているが、それは、ここに捨てられたたひとつのこみが、波にさらわれて地球の海を汚し、その海に住む魚にも影響を及ぼし、ひいては私たちの内なる環境に巡り巡ってくると思うからである。

環境問題の最大の困難は、それを知らない、わからないということではない。それを知っていて、わかっていて、予想されながら、行動にうつされない、強いエモーションとなって生活の中で力となって実行されないことである。

ピラ配り、手伝って下さる方募集中。電話0474-511504森田あるいは、0474-5117054長塚まで。

# こんな公園になる！

谷津干潟の公園化工事が始まります。イラストは干潟南側に予定される観察舎など主要部分の完成予定図です。右下の写真は、グリーン作戦開始当時、北側護岸の半ば以上がゴミに埋まった状況です。一人の人間が始めたゴミ拾いが、しだいに輪を広げて、ついに国や県や市を動かし一六年後にこんな形で実を結びました。人間は素晴らしいことでもできると思いませんか？ あなたも、あなたも……。



干潟の周囲は散策路、北側には観察壁のついた観察広場3か所、休息広場2か所、東側には観察デッキ、西南側には観察壁のついた観察デッキなどが設置される予定です。

メインエントランスゲート

自然生態観察センター

ゴミに埋まっていた谷津干潟 (1975年)



「習志野緑地 (第2期) 基本設計業務 基本設計の概要」公害防止事業団 より

## 森田三郎と谷津干潟グリーン作戦の歩み

・一九七四年 「埋められゆく谷津干潟」の新聞記事の写真の中にふかんど時代の杭を見る。干潟周辺のヘドロは腐り、悪臭がひどく周囲はゴミの山。一人で「谷津干潟愛護研究会」設立。新聞配達の間合間にゴミ拾いを開始。

・一九七五年 習志野市が「谷津干潟は汚染が進み、数年で滅亡する」と発表。干潟保全の一人署名運動。ゴミの回収を国・県・市に交渉、全て拒否される。

・一九七六年 ゴミを拾ったあとに、ゴカイやカニが生息することを発見。習志野市議会が干潟保存を否決、埋め立てを強調。

・一九七七年 元旦、成否にかかわらず、「谷津干潟保存運動一〇年実行」を決意。交通事故後、松葉杖とギプスのままゴミ拾いを続ける。

・一九七八年 県企業庁が干潟に立てた看板を撤去。取り返してまた立てる。流木とヨシであずまやを建設。埋め立て地でセイタカシギの繁殖の保護・監視。

・一九七九年 緑地確保のため、二七四のテーブルとベンチを作る。それをめぐって企業庁と全面対決。自然保護団体・県自然保護課・県企業庁の三者会談で、約三分の二の緑地確保(上図の観察舎、淡水池など主要部分)

・一九八〇年 毎月第三日曜・火曜日の「谷津干潟グリーン作戦」開始。道路公団や建設会社・大蔵省など協力。ゴミの不法投棄で京成電鉄・谷津遊園と対立。愛護研究会会報「ふかんど」第一号発行。  
・一九八一年 市川市から習志野市へ転居。干潟の至近に住む。主婦のグリーン作戦のため谷津干潟環境美化委員会設立。プレハブの観察舎建設。企業庁と対立、自主撤去。

・一九八二年 京成電鉄所有部分の埋め立て。メダカの池造成に着手。谷津干潟友の会設立。谷津遊園閉鎖。

・一九八三年 干潟のアシ原でコミミスクの餌付けに成功。このころから習志野市の態度軟化しはじめる。公害防止事業団、干潟の公園化計画を発表。

・一九八四年 企業庁ゴミを月二回収しはじめる。大蔵省、湾岸道路緩衝緑地帯に干潟周辺整備計画を含め予算計上。習志野市、埋め立て計画を撤回。谷津干潟都市公園の管理者となることを決定。クリーン作戦百回。

・一九八五年 谷津パークタウン建設始まる。クリーン作戦にサーフボード登場。ハクチョウ、タゲリなど飛来。干潟でカブトガニ捕らえられる。谷津小四年社会科の授業で谷津干潟とり上げられる。  
・一九八六年 干潟西部クリーン作戦。朝日新聞の天声人語にとり上げられる。釣り糸、釣針の回収。

・一九八七年 市議会選挙に最高点で当選。二五万五千歩。走った車が使用不能になり、三代目干潟の車誕生。

・一九八八年 習志野市、秋津五丁目緑地に干潟清掃用具置き場の小屋建設を認める。干潟至近のインターチェンジ建設に反対。市議会が干潟整備計画採択。国設鳥獣保護区特別区に指定。

・一九八九年 第三回吉川英治文化賞、第七回朝日森林文化賞 自然保護部門最優秀賞受賞。「ふかんど」四〇〇号。

・一九九〇年 アルミ缶の回収はじめる。市議会でラムサール条約に谷津干潟の登録を要望。松下竜一氏のノンフィクション児童書『どろんこサプウ』出版。

毎週日曜日、午後1時から、干潟南側、フローネの小屋(よしずの小屋)で、バードウォッチングの指導などしています。

# ふかんど通信

発行 谷津干潟友の会  
習志野市谷津3-25-11  
TEL.0474-51-5044



## 楽園の子供達

18 絵と文

森田三郎

おれたちい、  
馬と駆けっこ  
したんだ！

……それはもう、三〇年以上も  
前のことでした。

谷津干潟が「ふかんど」なんて  
呼ばれていて、飛び込み台がいく  
つも海いん中に立っていて、こど  
もが背中に乗れるくらいウミガ  
メが泳いでいた頃だったなあ。

そんな頃、潮が引くと、岸から  
沖に四〇も地べたが出る、それは  
とってもとっても広い、遠浅の海  
だったんです。んだから、おれ  
たち子どもにゃあ、ほんとにおに  
おもしろい、三千方界の遊び場だ  
ったっけ。

ちは、気遣いみたく、めちゃくち  
やに元気が出ちゃって、うれしく  
ってたまになくなっちゃった。

オチンチンをさらけ出して、ま  
っ裸なんとお、自然と笑いがこ  
み上げてきちゃうし、心と体もぼ  
んぱんになったんです。うちを出  
るときはちよっと恥ずかしかった  
けど、母はよくこう言っていたっ  
け。

「いいかあ、さぶらう、もう少しお  
前がでっかくなったら、かあちゃ  
んさぶに六尺のふんどし買ってや  
らんかなあ……。それまではよお  
かまあねえだあ。お前はどっちみ  
ち汚すんだから、海っぱたでよ  
お、着もんぬいでよお、そこらあ  
草ん中あ、穴ほって隠しとけやあ  
……。んでなあ、海ん中じゃよお  
まっ裸でもなあ、ちっとも恥ずか



しかねえんだからなあ」と。  
あん時、「ふかんど」のまわ  
りや沖で、よく馬が泳いだり走っ  
たりしていた。砂も固くって、馬  
がつかばしっていくのを見ると、

ものすげくかっこよくって、うれ  
しくなっちゃった。潮だまりを横  
切ると、バシッバシッって水しぶ  
きが上がり、おれはじっとしてい  
らんなかったっけ。んでよくう、  
「おじさん、おれえ馬といっしょ  
にかけっこしてえっ！ んだから  
あ、ねえ、やってよお」

なんて言っていた。  
「ヨイドン」。おれは走った。  
馬とおんなじにだ。おじさんは馬  
の上から、

「すげえ、すげえどお坊やあ。早  
え、早えんだなあー。ほれがんば  
れえ、ほれがんばれえ」と、そう  
言っていたのだった……。

\* \* \*

※赤ふんは、小学校四年で買っ  
てもらった。母と一緒に六尺の赤  
ふんどしを買いに行ったあの日を  
一生忘れないだろう。おれは近所  
に見せてあるいた。あこがれの海  
パンは中一のときに兄の古い、だ  
ぶだぶのやつ。

### この町が好きだ

この町が好きです。習志野市という町が。  
面積では千葉県の全市町村のうちで一番小  
さい。それでも、JRの駅が二つ、私鉄の駅  
が五つ、高速道路のインターが二つ、港もあ  
ります。大学が二つ。

東京に近い。それでいて海があり、緑も、  
(まあまあ)あります。なによりも「町の中  
の海」谷津干潟があります。

谷津干潟はただの池じゃない。一日二回、  
潮の干満につれて海になり、干潟になる。日  
本有数の野鳥の楽園。魚が、カニが、貝が生  
きている海。

習志野市ってすごい町だと思います。いく  
らでも素晴らしい町になると思います。谷津  
干潟が公園になります。バラ園もあります。  
もっともいい町にしたい。こども達が海で  
遊べる町にしたい。川に下水ではなく、きれ  
いな水が流れる町にしたい。

いたるところに、木陰がある町にしたい。  
小さくてもキラッと光る、宝石のような町に  
したい。

日本一の町にしたい。きつとできる。



# 市会議員うちあけ話

(続)

初めはまったく五里霧中。今では、市当局も同僚市議も一目置かざるをえない実力派だ。

—習志野市の行政をどう評価しますか？

森田 けっこうよくやっていると  
思う。議員より職員の方が優秀かもし  
れない。議会答弁でも職員は質問の範  
囲内で答えることしか許されない。反  
撃はできないんだから気の毒という感  
じはします。議案のほとんどは市側が  
提出するわけだから、議員はそれをあ  
る部分では応援したり、反対したりし  
て方向づけをする場合が多い。選挙の  
とき、議員が自分がやった、やったと  
いうことも、行政側が出して来たもの  
が多いのが実態です。

—となると、議員の仕事は？

森田 もちろん市政の監視と市  
民の意思の反映。市議会と市当局の中  
で起こっていることを広く市民に伝え  
ること。それと大切なことは、遠い將  
来を考えること。

## ★「ふかんど通信」の効目

—この四年間、十分に実績を上げ  
たと思いますか。

森田 評価は市民の皆さんがす  
ることだけど、「市民に開かれた議会、  
市民に開かれた市政」ということでは  
多少の貢献はできたと思います。この  
「ふかんど通信」で市議会だよりを十  
五回出したということもその一つ。

普通の市民の目で見れば市政を明らか  
にできたんじゃないかな。たとえば、  
「ふかんど通信」の発行で、下品な嫌  
がらせのヤジが減った。戸張議員から  
「私に対する今までのようなヤジがな  
くなった」と感謝されました。

—ところで「ふかんど通信」は、  
だれかスポンサーがいると思っ  
てもいるみたいだけど……。

森田 そうだといいたくはないけど、  
毎回二万五千部くらい作る。いろいろ  
協力者がいて編集したり、配付したり  
ボランティアでしてくれるから出来る  
ことなんだけど、印刷費用と紙代だけ  
で大体一五〇六万円かかるのを、どこ  
からも金をもらわずやっていると、ど  
こから金をつきついでね。まあ、議員歳費  
をもらってるんだから……。

## ★精一杯やった

—四年間の具体的な成果では？

森田 環境と都市基盤の整備で  
は自分なりにやったという自負はあり  
ます。

・谷津干潟の保存が完全に実現して、  
工事が着工された。

・人工渚の造成が決定した。

・企業の埠頭ばかりだった習志野港に  
市の窓口を海に向かって開ける公共埠  
頭（面積一〇〇〇）を建設する計画が決  
定した。これは土地利用計画を強引に  
変更してまで、あるガス会社が進出し  
ようとしていた。それをまた保守系の  
議員が議会で誘導しようといういろいろ  
問詰めたのを阻止した。

・地下水汚染の調査が着手された。

・緑地の保全買い取り、具体的には実  
籾、藤崎、屋敷、谷津の斜面林の買い  
取り。

・ゴミ問題では大型ゴミ回収、市役所  
の紙ゴミ回収再利用、再生紙の使用。

・歩道、信号、ガードレールなど道路  
整備、三三三三線、三三三三線の右折  
レーン設置。水溜まりをなくしたり、  
道路標識を見やすくした。

・教育関係ではプールが全学校にでき  
た。設備の補修も積極的をやった。

・とくに下水には力を入れたつもりで  
す。四年前は一三％の普及率が、いま  
四七％になった。とくに谷津干潟に下



森田さん(3月10日谷津干潟自然教室で)

水が流入している谷津処理区の下水処  
理場計画も決定しました。もちろん、  
みんな俺一人でやった、なんていうつ  
もりはないですよ。職員も頑張った。

## ★風通しのいい市政に

—これから、市議員としてやり  
たいことは？

森田 引き続き、議会と行政の  
風通しをよくしていきたい。これだけ  
でも風当たりは強いんです。市民の皆  
さんにも是非、傍聴にきていただきた  
い。といっても、議員は休憩時間に控  
え室があるけど、傍聴者にはないん  
です。傍聴者が休んでコーヒーぐらい飲  
める施設をつくりたい。

それと、委員会の公開を是非やりた  
い。本会議より委員会の方が議員が本  
音で審議することが多い。過半数の委  
員が賛成すればできるんです。

—今後も一人会派でやるつもりで  
すか。

森田 べつに一人でなきやイヤ  
だというんじゃないんです。ただ、政  
党や会派に属すると、どうしてもそれ  
に縛られる。早い話、最近、定数増が  
問題になりました。俺は今の三二人で  
も議員が多すぎると思う。革新の人達  
は、人口一五万人の習志野市は、限度  
いっぱい四〇〇人まで増やせ、それが  
民主主義だと思わない。議員一人  
は民主主義だとは思わない。議員一人  
いれば、歳費だけで年間七一〇万円か  
かるんだから。だから、俺は歳費をう  
んと安く、ボランティアにして、利害  
にとらわれず、自由な立場からはっき  
り発言できるようにすればいい、と思  
っている。そういう意見は、政党、会  
派に属してはたんじゃ絶対言えない。

—選挙公報の問題は？

森田 この前立候補したとき、  
選挙公報がないのは新人に不利だと思  
ったんです。この周辺でも公報が出な  
いのは習志野と市原市ぐらい。市議会  
で何回か一般質問したんだけど、市長  
選挙についてはやる、といってたんだ

—俺は環境のドリンク剤

—「ゴミとまち」のこと。こうすればいいんじ  
ゃないか、ああすべきだという、それぐら  
いの意見の持ち合わせは、この私にだって人並  
みにたくさんある。そんな中で、私が自信を  
もって言えることは、自分はこうやってきた  
こう思い、そして念じてきたと、そんなこと  
くらいではない。総じて、「なんとかきれ  
いにしたい」という、その熱望し続ける力が  
あれば、万能ではないが、かなりのことがで  
きると思う。いろんな可能性、方法を捜し、  
作り出すことはできる。なぜなら、ゴミ問題  
に限らず、他のあらゆることも、「やる気  
こそ能力開発のフロンティアだ」とそう信じ  
ているから……。

—環境問題で方々から講演を頼ま  
れているようですね。

森田 去年で大阪だけの滋賀だの  
七件、今年も浦安市とか、これから大  
阪の豊中市や立川も頼まれてます。千  
葉県内の学校とかことも会とかが多い  
んですけれどね。

—どんな話をするんですか。

森田 俺はゴミや環境の専門家  
でもなんでもないんです。呼ぶ人の  
方が詳しくくらいですけど、とにかく俺  
の話で元気が出るっていうから行くわ  
け。ドリンク剤みたいなもんだね、こ  
りゃ。

—今度の選挙は、みんな一斉に環  
境問題をいっていますか……。

森田 いいことじゃないかと思  
います。けれど、もう一五年早く皆ん  
なが言っていてくれれば、俺もこんな  
貧乏して干潟の掃除をしなくてもすん  
だのにな……。

今にして思うが なよりの看板、意見、  
説得は、行動する後ろ姿、背中にあるのだと  
ゴミを出していた人たちが、なにもそ  
の人が特別に悪い人ではなからう。また、あ  
えて干潟を汚してやろうとか、環境を悪くし  
てやろうとかいう悪意はなかったと思う。つ  
い手軽で、便利だから、習慣となっていたの  
だろう。

人の情として、どこの誰かは知らなくても  
いつも自分たちがゴミを出している所で、誰  
かが拾っている。そうして少しずつきれいにな  
っていきっている。そうであれば、いつしか  
心理的に、社会的にブレイキになっていくの  
だろう。そう思っている。

—ただ谷津干潟を残したかった

当初、ゴミを拾うよりは投げ捨てる方が減  
るという自信はなかった。止まるのかもわか  
らなかつた。いつまで拾う行為ができるのか  
また、拾ってきれいになっても、谷津干潟が  
残されるという見通しも保証もなかった。  
でも、自分の範疇にあるものは、行動と思  
いでしかないと考えていた。傷つき汚れ、ゴ  
ミという重荷を負う谷津干潟の、その荷を軽  
くしてやりたかった。私は自然愛好家でもパ  
ードウォッチャーでもないし、市民・住民運  
動家でもない。ただ、谷津干潟を残したかっ  
ただけである。

「ゴミとまち」のこと。こうすればいいんじ  
ゃないか、ああすべきだという、それぐら  
いの意見の持ち合わせは、この私にだって人並  
みにたくさんある。そんな中で、私が自信を  
もって言えることは、自分はこうやってきた  
こう思い、そして念じてきたと、そんなこと  
くらいではない。総じて、「なんとかきれ  
いにしたい」という、その熱望し続ける力が  
あれば、万能ではないが、かなりのことがで  
きると思う。いろんな可能性、方法を捜し、  
作り出すことはできる。なぜなら、ゴミ問題  
に限らず、他のあらゆることも、「やる気  
こそ能力開発のフロンティアだ」とそう信じ  
ているから……。

（終わり）

1991 アースデイ ニュース

4月、5月はアースデイ。世界中で環境を守るさまざまな活動が行われます。谷津干潟では4月14日(日)に自然教室(谷津バラ園前のあづまやに午前10時集合)、16日(火)、21日(日)にクリーン作戦があります。

## 「ゴミ問題」を考える

—シリーズ その4— 森田三郎  
(全国市長会発行 月刊『市政』より)

今にして思うが なよりの看板、意見、  
説得は、行動する後ろ姿、背中にあるのだと  
ゴミを出していた人たちが、なにもそ  
の人が特別に悪い人ではなからう。また、あ  
えて干潟を汚してやろうとか、環境を悪くし  
てやろうとかいう悪意はなかったと思う。つ  
い手軽で、便利だから、習慣となっていたの  
だろう。

人の情として、どこの誰かは知らなくても  
いつも自分たちがゴミを出している所で、誰  
かが拾っている。そうして少しずつきれいにな  
っていきっている。そうであれば、いつしか  
心理的に、社会的にブレイキになっていくの  
だろう。そう思っている。

谷津干潟子ども自然観察会 五月五日(日) 午前九時三〇分 津田沼高校前バス停集合 連絡先は〇四七四一五三一八四五九 関(千葉県野鳥の会)